

The Kansai University Bulletin

Osaka, March 15th, 1926—No. 37

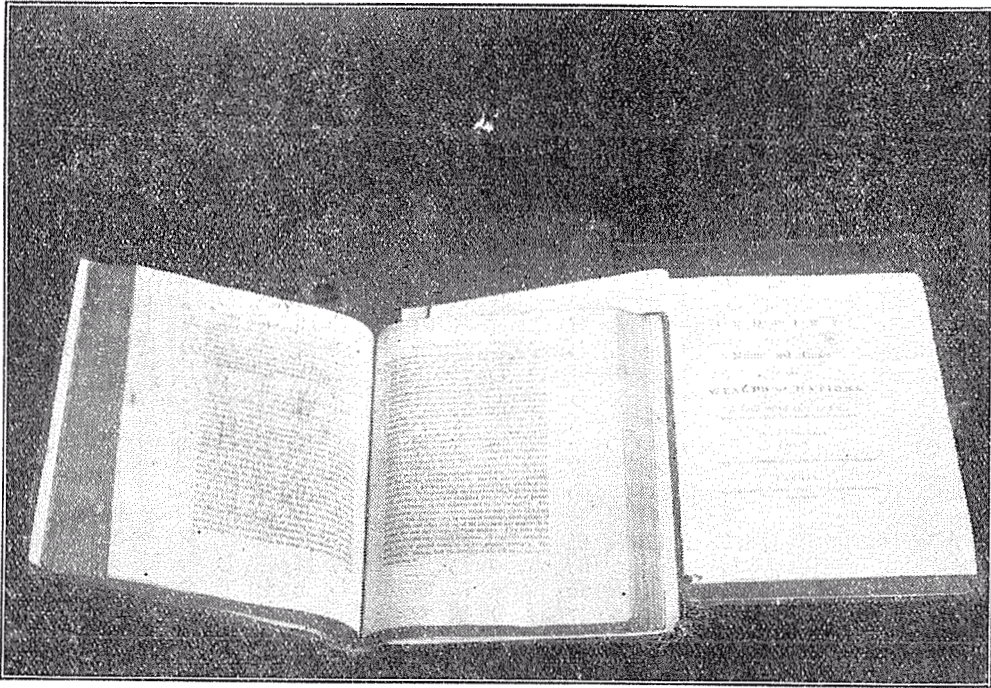
報學山里子

行發日五十月三

號七十三第

年五十正大

Adam Smith, Wealth of Nations, 1st edition



版一第「論富國」スミス・ムダア

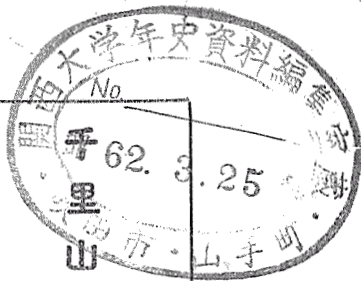
らか卷二下上版折つ四。るす當相に目年十五百も恰は月本で日九月三年六七九一はのたれらせ刊公てめ初が書本
ふ云とたつあで志六十磅一は格價の時當頁八七五で編五・四第は卷下頁〇一五てめ收を編三・二一第は卷上り成

阪 大

堀 佐 土 話 電
番〇七五五・九四〇一

局 報 學 學 大 西 關

座 口 金 貯 替 振
番 五 七 八 二 一 阪 大



千里山學報 第三十七號

目次

- 挿繪——アダム・スミス(國富論第一版(表紙))
—黒田莊次郎氏—大原敬藏氏
- 貨幣資本論(二) 關西大學講師 中西仁三
- 學内報——定時專任教員會開催—學部及び専門部
- 卒業試験施行—本學年度授業修了—沖中教授轉
- 住—住友評議員逝去—スミス(國富論)出版百五
- 十年記念經濟學者肖像展覽會—スミス(國富論)
- 出版百五十年記念晚餐會
- 校友の面影——黒田莊次郎氏—大原敬藏氏
- 校友彙報
- 學生彙報
- 初めてテヨークを執りて 今山生
- 學生寄稿
- 千里山歌壇
- 千里山俳壇
- 新刊紹介—雜錄

貨幣資本論 II (二) 貨幣の資本性

關西大學講師 中西仁三

第二節 貨幣資本學說の批評(續)

(二)貨幣資本は産業資本の一形態なりとする處の、不可解なる又實際の經濟事實と矛盾する假定に依つては、貨幣資本の資本性は如何なる點に存在し得べきものなりやは、之れを知り得ないのである、財貨が賣却せらるる事によつて其の形態を變ずる處の貨幣額なるものが何故に資本たる事を得るやの理由に就きては、Marxの説明せざる處である。商品の賣却によつて獲得せられたる貨幣が、商品の賣却よりして次に具體的なる生産資本に變形せらるるに至る迄の間に、何故に資本たる事を得べきや。換言すれば何故に貨幣資本は一般的に資本性を具有するものなりや。之等の問題に對して彼れの與へたる唯一の解答は、貨幣を以つて初めらるる再生産行程の一要因を貨幣が形成するに由るものなりとすのである。然し注意すべきは、貨幣が財貨に具體化されずして抽象的に一の購買力として存在すべき期間は、多少時間的の延長を有しなればならない。若し時間的の延長を缺きて貨幣が貨幣として存在すべき期間が無に等しき時は、貨幣を以つてする處の財貨の間接交換は中止せられて、財貨を相互に直接に交換するに至るべく、此場合に於いて貨幣は價值の一般的標準として存在し得るも、最早や交換手段として存在し得ないであらう。吾人が問題とする貨幣の資本性云云に關しては、交換

手段としての貨幣を考察すべきものである。然れば貨幣に表現せられたる購買力は其の形態の下に多少時間的に存在する事を要するもので Marxも此點に就きて同様の考へを持つて居つた。貨幣は生産資本に還元せらるるが爲めには、一定期間貨幣として静止状態を持續しなければならぬ。貨幣は購買又は支拂の資源として—貨幣が其の流通を一時的中止して靜止的に人の手に留まる事—貨幣資本たる職能をなし得るのである。貨幣として静止期間中に於いて一定の貨幣額が資本性を具有するや否やの問題に就きては、吾人は先づ如何なる特質に基きて Marxが財貨に對して資本性を附與するやを考察して、然る後に於いて貨幣にも此の如き資本的特質が存するや否やを、結論しなければならぬ。彼れに依れば、財貨は財貨として其の性質上初めより資本たるものではない。財貨が資本たる特種の社會的性質を有し得るは一定の歴史的條件の下に於いて然るものであつて、財貨が資本として特種の社會的性質を具有するは、資本家の手に於いて労働者搾取の手段となるに由るものである。然らば貨幣は如何にして此の如き性質を有する事を得べきや。貨幣は存在の前提として生産資本とは異なる處の條件を有するものである。貨幣額は社會的生產に參與する人人の間を連結するの手段を供するものなるに反して資本なるものは労働手段を支配し得る處の人人—資本家—が多數の無産者に對して有する權力關係を示すものである。貨幣が生産要素に變形し得るこの單なる事實よりして、貨幣は生産要素の抽象的表現にして價值としての貨幣は存在す結論する事は

誤である。貨幣が生産要素に變形し得るの理由は、貨幣の本質自體に求むべきもので、其れよりして Marxの證明せんとするが如くに貨幣を以て生産要素の抽象的表現なりとしか又は潜在的資本なりとかなすの結論は生じて來ないものである。生産資本が生産行程に於いて労働力を利用する事によつて、餘剩價值を創造するものなるの理由を以て、貨幣も亦餘剩價值を創造し隨つて資本たり得るものなりとはなし得ない。資本循環行程に於いて其の本質を異にする貨幣資本と生産資本とが前後關係を有するの理由に基きて生産資本の特質が貨幣資本にも存在し得るものと論じ得ないのは明白であらう。生産資本は其の利用によつて餘剩價值を創造し得るが故に資本たり得るも、貨幣資本は貨幣形態に於いて存續し得る限り何等餘剩價值を創造し得ざるものなるが故に資本に非ずと、結論すべきものなりと考へる。Marxに隨へば貨幣は資本家に餘剩價值を齎す處の資本循環行程の一段階をなすものなるが故に、資本家よりして考ふれば、貨幣は資本の變形しつつある期間に於いて資本たる事を得べきものである。然し餘剩價值の創造即ち財貨を資本化するの特質は生産行程中に於いて表はれ來るものなるが故に、生産資本に對しては餘剩價值は歸屬せしむる事を得るも、貨幣資本は之れに參與するの權限なきものである。換言すれば貨幣資本は何等生産し得ざるものなるが故に資本たる事を得ないものである。純粹の貨幣資本なる概念は—財貨の賣却によつて獲得せられ生産手段購買の爲めに支出せらるべき貨幣—實際の事實と語用とに對して一致し得ないので、W—

Gに由つて得られたる貨幣は何物をも生産し得ない。例へば自己の金庫中に保蔵せらるる貨幣は利子を生じ得ない。随つて人人は之れを以て資本とは見ないであらう。後に至つて財貨購買の爲めに之れを支拂ふも貨幣は何物をも餘剰生産しない。唯自ら之れを他人に支拂ふ事に依つて、貨幣を自己に支拂ひたる顧客の手よりして自己が支拂ひたる商人の手に移動せしめたるに過ぎないのである。然し貨幣を自己直接に生産目的に使用せずして、銀行に預金するか又は他に貸與せし場合に於いては、事情は異なる處あるべきである。即ち此の場合に在つては貨幣は純粹の貨幣資本としてには非ずして、貸付貨幣資本として利子を生み出し價值を造り出すに至るであらう。然れば貨幣は純粹の貨幣資本として何等動くものではなく、随つて此點を誤解せる處のMarxの貨幣資本の説明の不充分なる事は、怪しむに足らざる事と考ふべきである。

(三) Marxは貸付貨幣資本は何故に資本となるに至るやの理由は、之れを説明して居らぬ。然れば此の重大なる經濟現象たる貸付貨幣資本の問題は彼れの學說に於いて不問に附せられて居る。即ち此の問題に就きては彼れは現象を記述するに止まり何等之れを説明して居ないのである。彼れは貸付けられたる資本を一つの商品と同一視し、而して之れが使用價值に對しては利子の形式にて其の價格は支拂はれ、其の使用價值の特質は直ちに消費せらるる事なくして、反對に價值を益増加せしむるものなる事を、注意するのである。資本として見たる貨幣の使用價值は、所有者に對して平均的利率を齎すものなりとの點に、其

特質を求むべしとなして居る。貨幣資本家は一定期間貨幣の支配權を放棄する事に依り、産業資本家に貨幣の使用價值を讓渡するものである。Marxは貨幣の貸付を商品の賣却と同一視して論ずるものなるが、之れに由つて經濟生活の研究者に對して現象の意味を明白ならしむる事を得べきかは知らねど、決して之れに由つては學問的の説明は生じ得ないのである。彼れに隨へば貸付資本は貸出者Aに對しても亦借受者Bに對しても共に、資本を表はすものなるが、然らば何故に貸借の兩當事者に對して貨幣は資本となり得るやを次に説明すべきものである。Aに探つては貨幣が價值増加の行程に投下せられて、Aに對して餘剰價值を齎すものなるが故に資本たり得べく、Bに探つては貨幣が生産資本に變形せられて餘剰價值を造り出すものなるが故に資本たり得るのである。左ればA及びBの兩者に對して貨幣は生産資本に變形せられ、生産的に利用せらるる云ふ同一の原因よりし貨幣は資本たり得るものである。資本として見たる貨幣の貸借は、貨幣が實際に於いて資本として利用せらるる事を前提とせずもので、Aは貨幣を貨幣として讓渡するのではなく、資本として讓渡するものであつて、貨幣が事實上資本に變形せらるるは、借手たるBの手に依るものである。Marxは貨幣に利子を生み出す能力の存する事は、Bの手に於いて行はるる其の生産的使用に歸せしむる事に依り貸付資本の問題を純粹の貨幣資本の問題に還元せんとするのである。後者の問題に就きて彼れに依つて未だ説明せられざりし處の問題に即ち一定の貨幣額が産業資本家の手に於いて

如何にして價值を造り出すに至るやの問題は未だ説かれざる疑問として残らざるを得ない而して、(二)に於いて説明せし處よりして明かにせられたる、純粹の貨幣資本の存在の不可能より考ふる時に於いては、貨幣貸付資本なるものも亦存在し得ないものと、結論しなればならない。

Marxは貨幣の貸手と借手との間に行はるる行爲を、貸出されたる貨幣が資本として變化する實際の運動との間には、差別の存在するものなりと高調する事に依つて、貸付資本の個々の性質を維持せんを試むるのである。彼れは利子を生み出す資本を獨立の存在物となし、生産及び流通兩行程とは無關係に自ら價值を増加せしむる處の價值として之れが存在を維持せんとして、之れを主張するものである。彼れは利子を生み出す資本なる概念に於いては、資本循環行程及び之れを可能ならしむる中間の行程は必要ならずとし、貨幣は資本の循環行程に依る事なく、唯之れを借手たるBに讓渡する事に依つて、資本と化し得るものなりと主張するのである。前には資本の循環行程に依つてのみ貨幣は資本になり得るものなる事を、證明せんを努力し、今又此等資本の循環行程は貨幣の資本性には必要なく之れを度外視して可なりとなすのである。現在の彼れの主張よりすれば、貨幣が生産要素に變形し得るの潛勢力を有する云ふ事即ち貨幣の資本性決定の原因として彼れの説く處のものは、貨幣が資本として表現せらるるに當りての必要條件とはならざるの結果を來すものである。G'G(G'利子)なる形式に於いて、生産關係の最高度の顛倒と客觀化と

を示せる概念し難き資本の一形態を見る。利子を生み出す資本として固有の生産行程に先行する處の一の資本形態、貨幣及び商品が生産に關係なくして價值を増加せしめ得る可能力を最も明白に表はす、資本の神秘化を見るのである。Marxは人間が資本を偶像視し、資本の貨幣形態に於いて利子發生の玄妙なる獨立せる一の源泉を見るに至るべしと論ずる事に依つて、貨幣の生産力に關する最後の説明をなさんとするのである。即ち全再生産行程の結果たる餘剰生産を以て、事物自體に屬する一の特性と見らるべしとなすのである。無論彼れが之等の説明に際して、一の社會的關係の生み出す生産物を、恰も事物固有の特性の生む生産なるが如くに觀念する心理的過程が、日常吾人の文化生活の各方面に於いて行はれつつある事、即ち社會的關係が事物固有の關係と見らるる事あるを、正しく認識して居る。然し此の如き心理的考察に依つては實際の經濟事實は説明し得ざるべく、又如何にして如何なる理由に由つて貨幣は經濟人の手に於いて、價值を増加し又増加し得るやも解する事を得ないものであらう。若し生産と無關係に價值増加が行はれ得るものなりとなれば、貨幣が利得を生み出すの事實は他の經濟的社會的關係に依つて、初めて可能となり又説明せらるべきものでなければならぬ。

貨幣を資本とししむる處の特殊の關係は何ぞやとの問題に就きては、吾人はMarxの理論よりしては其の解答を得る事を得ない。此の如き解答は資本を以て勞働者搾取の手段となす、彼れ一流の理論よりしては之れを豫期する事を得ないものである。

資本循環行程なる假定は誤謬にして、之れを以てなす説明を却つて迷惑せしむるの結果を來すのである。順次に種種變形をなす處の産業資本又は資本價值等の、幻覺的概念を創造する事に依つて *Marx* は却つて實際の經濟關係を曲解する事となり、貨幣資本に對する正確なる説明は、不可能なるに至るであらう。産業資本循環行程なる概念中に、種類を異にし併行して行はるる二種の行程を混淆せしむる事に依つて、彼れは結局純粹の貨幣資本及び貨幣貸付資本の兩者の資本性を、説明し得ざる事なるに至るであらう。

著名なるマルクス主義經濟學者中に於いて彼れ同一の觀點に立ちて、貨幣を以て資本の一形態として觀察するものとしては、*Hilferding*, *Tugan Baranovsky*, *Sombart* を擧ぐる事が出来る。此等の學者に就きて見るに、貨幣資本に關する詳細なる研究を缺き、貨幣資本概念の理論的根據に於いてマルクスの理論に依るものなりと考へらるべく、隨つて吾人は彼等の理論をも亦肯定する事を得ない、マルクス理論に對する批評は其の儘彼等の理論に對しても適用し得べきである。

貨幣と資本との關係を論じて全然異なる結論に達したるものとして、吾人は *Liehmann* の學說を考へて見やう。彼れは貨幣に於いて資本の純粹なる且つ唯一の形態を見るのである。費用を貨幣にて表現する事が即ち資本の本質を造り出すものである。資本概念は財貨其のものに固有せらるるには非ずして、貨幣的計量形態に屬するもので、財貨は財貨として資本となるものではなく、資本となるは其の貨幣的表現に外ならない。財貨の資本たる

性質は客觀的に財貨に附隨するものではない。財貨が費用財貨たる場合に於いて、初めて資本となり得るのである。即ち財貨が効用及び費用の比較即ち經濟的考量—彼れは之れを以て經濟行為なりと解して居る—の範圍に入り來りて、費用として考へらるる場合に資本となり得るのである。營利經濟の主體がなす處の費用—苦痛感念—を得らるべき効用との比較は、數量的に表現せらるるもので、經濟の二要素たる費用と効用とは貨幣的表現の下に表はれ、貨幣額として分量的に觀念せらるるものである。欲望の感覺は人をして經濟的考量に導く原動力であつて、人人は一定の經濟的目的を達するが爲めに費用を出來得る限り合目的的に使用するの點に、經濟的考量を置くのである。生産手段を獲得し之れを使用するの理由は、効用と費用との比較に求むべく之等を數量的に比較する事に依つて、貨幣利得なるものは生ずるに至るのである。經濟利得は労働より生ずるものでなく、又土地及び資本—生産手段—よりも生ずるには非ずして其は常に消費者の欲望よりのみ生じ來るものである。土地労働及び生産手段—資本—等の生産要素より生ずる利得は、貨幣利得との間には相關關係存在するものなりと雖も、後者は前者に依つて影響せらるるものではなく、其の發生の根源は前者の其れとは異りて、消費者の心理的計量消費者の慾望に存在するものである。其の表はれ來る處の形態如何は之れを問はず、總ての經濟的利得は消費者の効用評價に基くものなる事、換言すれば經濟の本質即ち人人は費用に於いて表はるる苦痛感念を以つて、更に大なる苦痛感念を省き得る

場合に於いて費用を支出するものなるの點よりして、經濟的利得は生じ來るものである。*Liehmann* は此の如く利得なる概念を經濟行為に由つて獲得せられ、貨幣形態に於いて實現せらるる餘剩効用をなし、資本を以て此の如き貨幣利得を獲得するの手段と見、資本を費用要素 (*Kostfaktor*) としての労働に對立せしめて費用財貨 (*Kostgüter*) に限定すべきものなる事を主張するのである。此等の費用財貨は貨幣額にて表示せらるる處の營利經濟の効用に對立せしむるが爲めに、貨幣を以て表現せらるべきもので、之れに由つて純粹利得の發生は可能となり得るのである。貨幣にて評價する事が貨幣の本質を造り出すものであつて、又營利經濟に於ける費用と効用とを貨幣に由つて對立比較を可能ならしむるが爲めには、資本なるもの存在を必要とするのである。貨幣利得を確立せしむる手段として費用財貨の貨幣的評價なりと解せらるべき資本概念に對して、貨幣も亦他の財貨と等しく効用を造り出すが爲めに消費せられ得べしとの見解の下に、之れを結合せしめらるべきである。具體的なる費用財貨と等しく貨幣も貨幣利得を目的とする處の費用及び効用の比較に關聯して、貨幣にて表はさるる効用に對して、貨幣にて表はされたる費用として永續的貨幣利得獲得手段として存立する事に依つて、資本となり得るものである。費用財貨としての生産手段は、資本の財貨的性質を示し

貨幣は資本の貨幣的性質を表明するもので、此の兩者の對立に基きて *Liehmann* は、財貨資本と貨幣資本とを區別するのである。而して彼れの謂ふ所の貨幣資本とは總ての貨幣額

即ち永續的貨幣利得の根源を包含するものでただ注意すべきは此場合に於いて貨幣は常に流通し投下せらるべき事である。而して此の貨幣投下なる概念の中には永續的利得なる概念の含まるものなるを、知らなければならぬ。貨幣資本は眞の意味に於ける又最初の資本概念であつて、之れに由つて資本主義も生まれる。此の貨幣資本概念特に流通資本なる概念よりして、計量形態としての資本概念は他の永續的具體的なる費用財貨に迄、擴張せらるるに至るのである。

Liehmann の根本的觀念に就きての以上の鳥瞰的考察に依つて、彼れの定義し彼れの説かんとする處の貨幣と資本との關係は了解し得るであらう。彼の學說の特質は—彼れは自己の學說に心理學派の研究の結果を極度に取り容れ之れを利用したりと一般に論ぜられて居る—經濟現象を、現實の客觀的世界より經濟主體の心理的狀態に還元せる點に存する事を知り得るであらう。されば彼れの學說は、全部の世界を總て吾人の心裡に存在するものとなし、吾人の心理現象よりして外界を組立てんとする處の哲學的唯心主義と同一の誤謬を犯すものなりと考へ得る。哲學的唯心主義は事物の形状色彩距離等を吾人は如何にして區別し得るかを、吾人が心裡に受くる感覺に由つて之れを説明すべきものなりとなす點に於いては、正確なる理論なりとなすを得れど、之れを以つてしては、何故に吾人は或る場合に樹木を見、他の場合に家屋を見るや、即ち外界より受くる刺激の差異に依つてのみ説明し得べき、吾人の感覺の内容に就きては之れを説明し得ないものである。

即ち永續的貨幣利得の根源を包含するもので、ただ注意すべきは此場合に於いて貨幣は常に流通し投下せらるべき事である。而して此の貨幣投下なる概念の中には永續的利得なる概念の含まるものなるを、知らなければならぬ。貨幣資本は眞の意味に於ける又最初の資本概念であつて、之れに由つて資本主義も生まれる。此の貨幣資本概念特に流通資本なる概念よりして、計量形態としての資本概念は他の永續的具體的なる費用財貨に迄、擴張せらるるに至るのである。

即ち永續的貨幣利得の根源を包含するもので、ただ注意すべきは此場合に於いて貨幣は常に流通し投下せらるべき事である。而して此の貨幣投下なる概念の中には永續的利得なる概念の含まるものなるを、知らなければならぬ。貨幣資本は眞の意味に於ける又最初の資本概念であつて、之れに由つて資本主義も生まれる。此の貨幣資本概念特に流通資本なる概念よりして、計量形態としての資本概念は他の永續的具體的なる費用財貨に迄、擴張せらるるに至るのである。

Lieftmann の學説は何故に吾人は一般に價値評價を行ふやの原因に就きては説明する處あり、又吾人の經濟行爲の心理的前提を與ふるものなりと雖も、彼れは吾人は何故に或る場合には高く評價し、他の場合には低く評價するやを説明し得ないものである、而も外界の財貨に由つて定めらるる吾人の慾望充足の分量に、經濟行爲の目的は存在するものである、慾望の充足に就きて秤價行はれ、此の秤量に基きて初めて生産手段は經濟圏内に入り來るものであり、此等の生産手段は數量的形態即ち貨幣量に依つて表現せられ、以つて經濟的秤量行はれ又利得は計算し得べしとす事は總て正當なる議論にして又經濟行爲の前提なりと雖も、之れに由つては場合の異なるに隨ひ利得に大小の生じ來るの事實は、之れを説明し得べきものではない。經濟理論の説明すべき處は、利得の大小にして各利得獲得行爲の前提をなす心理的の秤量ではない。利得發生の心理的前提は、彼れの記するが如く、總ての經濟主體に於いて同一なるものであるにも拘らず、或るものは大なる利得を獲得し、他のものは小なる利得にて満足しなければならぬ。効用と費用との差額は總ての經濟主體に於いて存在するものである。然し其の差額の大小は常に同一ではあり得ない。費用に對比して効用の過剰即ち利得なるものは、勞働又は享樂能力一面は氣候に由り他面は人の心理的性質及び社會的地位に由つて定まる一等の主觀的條件に由つて定めらるるものではなく、内面的心理的要因と無關係なる客觀的條件に由つて定まるもので、此の意味に於いて初めて經濟理論上の問題となつて來る

のである。餘剩効用—利得—の分量を決定するものとして、一定の生産手段又は交換手段の所有を意味するもので、此等の所有に由つて利得は益増加せんとするのである。經濟的概念としての資本は其の單なる所有なる事實が他の人に比較して、利得を大ならしむる事を得るの可能な財貨の全體を包含するものである。然らば利子理論の説明すべき事は生産手段の所有は何故に利得を大ならしむるや、即ち經驗上知らるる處の、生産手段の所有量と利得分量との相關關係を可能ならしむる原因如何の説明に存在するのである。之れに對する解答は種種存在し得るものなれ共、茲に再び Lieftmann の所説に反對して次の事を特に主張して置く必要があらう。資本概念を論ずるに際しては、單に經濟的利得自體を論ずべきに非ずして、個個の經濟主體に於いて利得に大小の存在するの理由を説明すべきものである。即ち資本理論は効用と費用との差額—利得—が人人に依つて何故に大小の差を生ずるや、何故に或人は大なる利得を儲け他の人は小なる利得を儲くるものなりやを説明すべきものであつて、何故に一般的に人人は効用餘剩を獲得するや、何故に人人は利得を儲けるやの問題は論ずるの必要なものである。何となれば此の如き問題は經濟理論の前提をなすに過ぎずして、之れに基きて總ての結論は演繹せらるるのである。Lieftmann は資本論に於いて利得を得て一般論に論ぜんとするもので、隨つて彼れの論ずる處は全然異なる又經濟理論上關係なき問題にして彼れは資本概念に對して經濟理論に於いて爲すべき又爲し得べきものと異なる内容を附與

するに至つたのである。されば彼れの資本問題解説が正しきや否やは經濟學的觀察點よりしては云云し得ざる處である。何となれば彼れは資本の問題と何等關係なき問題を創造して之れを論じて居るからである。

Lieftmann は貨幣を二重に資本と關係せしめて居る事も注意しなければならぬ。第一彼れは貨幣に於いて資本の唯一の表現資本の唯一の存在形態を見、第二に貨幣を以て全資本の一部として之れを觀察して居る。第一の意味に於いて貨幣は其の職能の點よりして、費用及び効用の計算單位として資本の表現物とせられ、第二の意味に於いて交換手段としての職能上貨幣は資本構成の一部として考へられて居る。吾人の考ふる處に依れば、費用及び効用觀念の表現手段として貨幣は資本の表現物とはなり得ない。或種の對象物が貨幣的表現形態に於いて表はるるの事實よりしては貨幣概念は構成する事を得ないものであり、更に如何にして生産力を有するやは之れを説明し得ないものである。餘剩財貨の創造—常に交換經濟に於いて自己の財貨と他人の財貨との交換に由つて生ずるもの—は更に説明せらるべきもので、而して此等眞實の財貨の餘剩のみが効用の餘剩及び慾望の充足を生ぜしめ得るものである。價值單位又は貨幣表券 (Geldzeichen) の増加に由つては、慾望の満足は生じ得ざるべく、價值單位が餘剩を構成するの事實よりして、財貨の餘剩は了解し得ざる處である。此點は Lieftmann も資本は効用餘剩の獲得手段に非ずして、貨幣利得の手段なりと論じ居るより見れば、考量して居るものと見るべきである。貨幣表券は價值

單位として價值を確定し、之れに依つて日常行はるる實際の經濟行程の一觀察方法を供するものである、此の點も亦彼れの考察せし處であつて、彼れに隨へば資本概念は財貨には非ずして、財貨の觀察方法即ち財貨の經濟的觀察方法である。若し彼れが自らの思索の糸を終局に迄延長する時は、遂に彼れの資本概念の全構成を否定せざるを得ざるに至るものであらう。貨幣單位は費用及び効用評價の表現に過ぎずして、財貨とは何等共通の性質を有せざるものなりとの觀點に立ちて考ふれば、財貨の生産的移動に關して何等觀念し得ざるべきものである。廿度と七度の温度の比較よりしては、温度昇騰の原因は知る事を得ざるべく、十萬麻の財貨と一年後十二萬麻に増價せし財貨との比較に依つては、價值増加の原因は之れを知る事を得ない。損益勘定を援用して棉花紡績に由つて一萬麻の價值増加せりと考へ、又生産費即ち勞働力原料品補助財貨等に對する必要支拂額と生産せし財貨の賣却價格との比較より生ずる總ての利益勘定を考ふるも、之等の數字の比較よりして數字に表はされたる價值の差は生じ得べきものなりと雖も、其れを生ぜしむるに至りし原因は之れを知る事を得ないものである。資本の本質をなす處のものは、餘剩獲得の能力であつて決して經濟主體の計算に於いて數字的表現を能ふるの能力ではない。上述の如く Lieftmann の資本概念を否定する事に依つて、眞の意味に於ける貨幣資本概念即ち交換手段として見たる貨幣として資本の一部を構成する資本概念の、維持し得べからざる結果を來すに至るは當然である。貨幣資本が上述せる意味に於

ける資本に附隨するよりして其の資本性を有するに至るものなるが、該資本概念を上述せる處に依つて否定せらるるの結果として、又否定せらるるに至るであらう。資本の一部を構成する貨幣資本は、其の上層概念たる資本概念と同一の運命に陥らなければならぬもの、即ち吾人は資本の本質は、唯其れが永續的貨幣利得の根源として働くの點に、求むべきものなる事を知り得るのである。

Lieftmann は費用財貨の貨幣的評價なりとする彼の資本定義を次の如く説く事に依つて正當ならしめんと居る。即ち効用及び費用の比較手段として解すべき貨幣の價值標準たる職能は、貨幣の交換手段たる職能より派生するものなりとするのである。彼れは貨幣の價值標準たる職能は、高度の經濟發達の階段に於いて表はれ来るものであつて、貨幣が唯財貨交換を可能ならしむるのみならず、經濟活動が貨幣を仲介せらるるに於いて、見る事を得べきものなりとして居る。然し之れに對して吾人は再び次の事を主張せんことを欲するものである。即ち上述二種の貨幣職能は互いに獨立して併存するものであつて、一は財貨に認むる價值を客觀的に表現せんとする價值觀念の心理的の必要に基き、他は自己の勞働の生産物を他人の其れと交換するが爲めの物質的必然性に基くものである。兩貨幣職能は互いに獨立して存在するものである。

Lieftmann の先驅者として同一の觀察點に於いて資本を論ずるものとしては Menger を示す事を得。彼れは財産の貨幣價值が經濟的評價の對象となり、財産が獲得せらるべき貨幣の額として計量的に示さるる範圍内に於いて

營利經濟の有する財産を資本なりと定義して居るのである。

Schmoller も亦上述の概念定義を正當視するの傾向がある。即ち彼れは個人資本なる概念に於いては主として貨幣的表現を意味するものとなして居る。同様の觀念は、貨幣價值計量を以つて資本の本質的要素なりとする R. Passow に依つても、代表せられて居る。

彼れは自己の意見を主張するが爲めに多くの學者の説を援用して居る、即ち Kleinwächter, Hildebrand, Fetter, Clark, Philipovich 等、然し引用せられたる學者の説は決して彼れの考へを肯定し又支持するものではない。彼等の主張する資本は貨幣に於いて價值の大きさとして、其の純粹なる完全なる表現を得るもので之れに依つて財産の大きさが決定せられ又他のものと比較し得る事、彼の主張たる貨幣價值計量は資本概念に本質的たるものなりとする事との間には、大なる逕庭の存在するものにして前者を基礎として後者は主張し得ないであらう。Fisher は更に一步を進めて、資本概念は貨幣價值計量の行はるるや否やに關係せずして、帳簿記入の行はるるや否やに關係するものなりと論じて居る。

上述の資本理論の傾向に誤謬の存在する點は、其の代表者として Lieftmann を擧ぐる事を得べく隨つて彼れの學說に對して詳細に批評する處あつたものである。此の派の論者は資本の學問的定義を日常の用語に適應せしめんとしたるに求むべきものと信するのである。日常の用語に於いては個人的利害關係より觀察して、語の内容を定むるものなるに反して、學問上に於ては個人的利害より全然

脱却して、其の内的本質よりして事物及び關係の内容を定めなければならない。兩者を混淆する事は概念の内容を不純ならしむるものである。資本なる語の定義に當りて特に兩者を混淆する事往々にして、資本に由る利得獲得の個人的欲念は利得發生を可能ならしむる原因關係を見出すべき、學問的興味を無ならしむるに至るものである。

次節に於いて貨幣資本概念を構成せんことを際して、探るべき方法は、資本概念をして通常考へらるる處と全然異なるものならしむるものであるべきではない。嘗て Menger が國民經濟學に對して、資本なる語は經濟生活より借受けられ共、其の内容は自ら之れを定めたりと批難せし處の、同一の誤謬を繰返したくはない。然し吾人は彼れの如くに資本概念を實際生活上の其れと一致せしむるを以て満足し度くはない。吾人は資本概念をより深いより一般的なる社會的關係と因果的に結び付けん事を欲するものであつて、之れに由つて資本概念に對して客觀的學問的の基礎を與へ得べきものなりと信するのである。

第三節 貨幣資本概念の構成

一定種類の財貨を所有するよりして、利得の生み出さるるの事實は、經濟生活の齎す處の一の經濟的現象である。されば國民經濟學の目的とする處は、此等經濟的事實の根柢をなす處の社會關係を解釋する事によつて、此等の經濟事實を説明し、以て此等の現象の一定の社會現象に對する因果的依據關係をば客觀的に素直に確定せんとする、學理的欲求を満足せしめんとする點に存在すべきである。利得の發生は資本を度外視し資本の範圍

外に於いて生じ来る現象ではなくして、資本自體の發現の方法及び形式に過ぎない。換言すれば資本の本質を特徴付ける處の内在的特性なりとすべきものである。隨つて利得の創造なる事實よりして資本を説明し、又資本の存在するの事實よりして利得の創造を説明する事は、共に論理的に不可能なりとすべきもので、資本及び利得の創造は吾人が今や説明せんとする處の同一の社會的現象の兩面に過ぎないものである。資本理論の下に於いては利得を利得として一般的に之れを論ずべきものではなくして、異なる經濟主體が獲得する處の利得に種種差異の存在するの理を説明すべきものなる事を、特に注意するの必要ありと考へる。資本理論は何故に或るものは他のものよりもより幸福により裕福に、生活し得るやの理由を説明すべきものであつて、斯くして初めて資本理論は與へられたる職責を盡し得るものなりと、見るべきである。

私有財産制度なる一般的前提の下に於いて財貨は資本となり得るもの、即ち普通勞働利得以上の餘剩利得を獲得し得るものである。Gombart は資本主義の最後の根源は私有財産制度に於いて求むべきものとして居る。總ての社會上の差等は其の原因を私有財産に求むべきもので、土地を占有する最初のものは土地を以て自己の所有物なりと宣言せん事を欲し、人人は之れを以て眞なりとして肯定するに至るのである。されば社會の眞の建設者たる私有財産は、又資本主義の創始者なりと見るべきであらう。

財貨は二個の條件の下に於いて私有財産となり得るのである。一は財貨の性質上一定の

流通範圍内に於いて其の存在量が稀少なる事
二は財貨が永續性を有する事即ち財貨が直ちに消費せらるる事なく又他の方法に依つても直ちに消滅せしめられざる事。以上の如き經濟的に價值ある又永續性を有する財貨は、人の所有せんとする處であつて、隨つて私有財産の對象物となり、社會的規範の保護の下に維持せらるるのである。人人は此の如き財貨を欲求し、此等の獲得に際して各人の間に利害闘争生じ、遂に法律の保護を必要とするに至るのである。財貨を所有し支配し得る人は、他の人に對して一財貨を所有せざる人の特權的地位に立つもので、即ち他人の使用を排除し他人をして其の利益に浴せしめざる處のあるものを有するのである。されば個人的所有なる事實は或る意味に於いては一の獨占類似の特權を有するものであつて、獨占は獨占者に對して他のものが有し得ざる特權的地位を附與するもので、所有權は社會的規範に依つて許可せられたる特權で、財貨の排他的支配を内容とするものである。過去に於いては土地畜群奴隸等の自然物が所有の對象となりしものなるが、文明及び技術の發達に隨つて所有の對象物たり得る範圍は、器具機械建物等の勞働生産物に迄及ぶに至つたものである。此等の物を所有する事は、吾人の需要財貨の生産を容易ならしむるのみならず、又生産を可能ならしむるに至るものにして、隨つて其の重要は益大ならざるを得ない。吾人の文化程度が高上すればする程、吾人の欲望は多種多様なるに至るべく、而して此等欲望を充足せんが爲めには、製造技術に依つて

めなければならぬ。而して之れに必要な生産の技術的手段即ち機械建物を有するもの換言すれば生産資源に對して所有權を有するものは、有せざるものに對して優越的地位に立つのみならず、他人に對して不可欠なる財貨を所有する事に依つて、支配的權力的地位に立つに至る事を知り得るであらう。

所有權制度は獨占制度に外ならない。即ち排他的支配制度に過ぎないものである。獨占なる概念は必ずしも獨占者が個人なるか團體たるべきかを、前提するものではない。獨占の對象物たる財貨が隨意に無制限に増加せしむるを得ないものたる以上は、獨占權は種なる經濟主體に依つて行使する事を得るのである。既に *Commut* は獨占權が多數の獨立せる又相互間に契約の存しない人人の間に分有せられ得るの事實を示して居る。唯獨占財貨は必ず或程度の稀少性を有する事を必要條件とすものである。Lange の記する處に依れば、此の如き獨占の自然的條件一財貨の稀少性一だに存在する時は、各獨占者は此の事實を自覺する事に於いて、獨占財貨の價格を引き上げんとする傾向を有するもので、明示的の契約の存在する場合と等しく、暗黙の提携に依りて最も利益ある點一最も利益ある價格一に到達し得るのである、此の如き暗黙の提携は私有財産制度に基く處の社會に於いては、常に生産手段及び生産要素の所有者間に存在するものであつて、此等の事業家は全體として市場に於ける需要を支配し、單一的の價格政策を實行せんと欲するに至るものである。此等獨占者の獲得する價格は後述する處よりして知らるるが如くに、常に販賣價

格に包含せらるる地代又は利子として表はれるもので、價格は生産者間に自由競争行はるるに雖も、獨占業者に利得を齎さない程度に迄は、決して下落し來らざるものである。生産手段及び生産要素の所有者の此の獨占的權力關係は、經濟的交換交通に於いて初めて表現せらるるもので、所有者が自己の欲望を自己の封鎖的經濟範圍内に於いて、充足しつつある間は、自己よりも所有量の少きものに對して優越的地位に立つか、又は自己の奴隸又は體僕に對して、權力關係に立つに過ぎないものである。土地に對する支配及び莊園制度の下に於ける不自由勞働者の使用に於いて見るが如き人間に對する支配は、傳統的因習的關係に基くものであつて、決して自由なる經濟交通に於ける營利活動に基くものではない。交換經濟の發達して總ての經濟的有機體が國民經濟なる大範圍に統轄せらるる場合に於いて、初めて生産手段の所有者の權力が單なる家長的封建的關係の狭小なる範圍を脱して、國民經濟的大範圍に擴張せらるるに至るものである。此の如くにして總ての經濟交通に參與する人人の間に於ける依存關係は發生し、各人は社會全般の爲めに勞働し、各人は社會全體に依つて自己の欲望を充足するに至り、此の如くにして初めて生産手段の所有者は自己の權力を自己に從屬する人々云ふ小範圍を超へて、國民經濟に携はるる人人の全體に對して發揮し得るに至るものである。總ての經濟人との間の相互的依據關係なるものが所有者の權力を發揮し得るの本質的の前提をなすものである。經濟上有用不可欠なる財貨の使用處分權を他人より奪ひ、之れに參與せしめざる事に依つて獨占的性質を帶ぶるに至る處の權力的地位を、其の所有者は充分に利用せんとするもので、其の利用方法に就きては、特權的所有者は他人の勞働の生産物を貢納賦役の形式にて、獲得するが如き直接的方法に依るものには非ずして、個人の自由に基き各人は當然自己の勞働の生産物を要求し得るが如き社會制度の下に於いては、間接的に行はるるものである。而して此の方法は表面的に正義公平なるが如き觀あるものなれども其の内容に至つては過去に行はれたる不平等不公平なる關係を想起せしむるものがある。交換經濟に於いては生産手段の所有者は、之れを所有せざるものに比して國民經濟全體の利得の中よりして、より大なる配分を取得る事、即ち生産手段の國民經濟的價值に適應する處の配分を取得るの方法に於いて自己の獨占的地位を利用せんとするものである。此の場合注意すべき事は、生産手段の價值隨つて生産手段の所有より生じ來るころの社會的生產物の分前如何は、生産手段の技術的生產能率のみに依つて説明するを得ないものなる事である。此等の價值は補助的生產手段 (Hilfsmittel) を利用し又は之れを利用せずして生産せらるる處の、財貨の生産費を比較考量する事に依つて、初めて決定せらるる事を得るのである。然し財貨の大部分は技術的補助手段を以てして初めて生産せられ得るものなるが故に、生産手段が生産の結果に對して要求し得べき配分は幾許なるべきやは、之れを知る事は不可能であらう。生産手段の價值は他の總ての財貨に於けるに等しく、其の存在量の稀少性に基くべきものである。生産材

料の性質上隨意に無制限に増加する事を得べき財貨、例へば化學的製品に於いても、其の生産に際しては、其の生産に必要とせらるる労働力の有限なるの事實に面接しなければならぬ。此等の労働力は自由増加し得ざるものなるの結果として、總て財貨の生産し得べき量は、一定限度を有して多少の稀少性の存在するの事實を知らなければならぬ。

貨幣の流通する事によつて、或る程度迄は利潤構成の行程は蔽はれ隠されて居る。即ち各人は自己の労働の生産物を其の貨幣價值通りに販賣する事によつて、自己の労働の生産物のみを獲得しつづつあるものなりと、考へられるであらう。然し實際に於いては財貨の所有者は自己の財貨に對して、其の生産に必要とせられたる労働分量に依つて定めらるる價值以上の價值を支拂はしむる事に於いて、國民經濟的利得の大なる部分否其の大部分を、自己に取得するに至るものである。生産手段の獨占價格は、消費者によつて支拂はるるものであつて、生産手段の所有者は貨幣に於いて一の購買力を獲得し、隨つて國民所得の主要部分の配分要求權を得るに至るのである。所有者の所得が無産者の所得に超過する餘剰所得なるものは、無産者が所有者に對して支拂ふ貢納に外ならないもので、此の如くにして所有者に由る處の無産者の搾取は、前者が一定の永續的の經濟財を獨占するに云ふ單なる事實に基きて、生じ來るものである。以上の如き搾取なる要素が、資本の本質を形成するに至るべきであらう。Marxが經濟生活を慎重に考察して此の搾取的要素を以つて、資本の本質なりとすべきものなる事を、充分に道

破せる事は、彼れの大なる功績なりとすべきであらう。Hilferdingは同一の觀察點に立ちて以上の思想を、次の如く正確に記述して居る。「價值は餘剰價值轉化する價值たる事に依つて資本となり得るものである。而して之は資本主義的の生産行程に於いて生じ來るもので、資本主義經濟の前提は生産手段に對する資本家の獨占と、自由賃銀労働者の存在に求むべきである」Marxの理論の缺點は事業家と労働者との關係に於いて、最も明白に又最も極端に表はれ來る處の現象を以つて、唯一の搾取形式なりと考へて、他の總て類似する處の搾取現象をば之れに依つて説明せんとなしたる點に、存在するものと考へらる。然し實際に於いては然らずして、労働者の搾取は資本の權力關係の最も多く表はるる形式なりと雖も、決して其は唯一の形式ではない。此の點は既にBöcherの説破せし處にして、資本の力は非常に錯雜せる種種の依存關係に於いて表はれ來るもので、單に事業家と労働者との關係に於いてのみ存し得るものでなく總ての生産的階級をして資本家に對する貢納の義務を負擔せしむる處には、必ず資本の力が存在するものと見るべきである。

Sombartも亦資本主義的企業家の利潤は自己の事業に従事するか又は他の事業に使用せらるるかを問はず、常に賃銀労働者の利得より生じ來るものなりとす事は、誤れる議論なりと認めて居る。即ち労働者の利得分前以外に於いて、獨立生産業者—農夫及び手工業者等—の労働利得よりも生じ來るものである資本家の權力關係は商品及び貨幣の所有に表はれ來るに等しく、土地の所有にも亦表はれ

來るものなる事を注意すべきである。即ち生産事業に従事する處の労働者に對して表はれ來るのみならず、一般に流通經濟に參與し且つ自己の労働力以外には何物をも有せぬ、總ての人人に對しても表はれ來るのである。Marx及びHilferdingが誤解せしが如く、無産者の搾取は生産行程に於いて生じ來るものではなくして、經濟的財貨の私有が認めらるる處の社會に於いて、一部のものが他のものの所有し得ざる處の何物かを所有し支配し得る場合には、必ず生じ來るものである。搾取は人人が貨幣の形式に於いて社會的の生産物に對する要求權を獲得し、而して其の要求權の根柢をなす處の獨占關係がより深く深刻せられ又其の範圍が大なれば大なる程要求權も亦益大なるに至るの方法に於いて行はるるものである。社會的の生産物に對する労働者又は無産農夫の配分に對して、資本家の配分の超過する事が即ち餘剰利得を構成するもので餘剰利得の源泉が土地の所有に在るか又は他の生産手段の所有に在るか何れかに依りて土地代又は資本利得即ち利子と稱せらるるに至る。人が特權又は獨占を得るの原因をなす處の財貨の所有が、即ち資本を創造するに至るもので、Marxが資本を以つて財貨自體を意味せしめず、財貨を仲介して生ずる人人の間の社會關係なりと論じ居るのは肯綮に於ける議論なりとすべきである。此の如き特別社會的關係の變化と私有財産制度の消滅とは當然に資本及び利子の存在を減せしむるに至るであらう。各人同一の時間労働同一程度に享樂財を所有し各人が自己の労働力以外は何物をも所有せずして總ての生産手段は社會の

所有に歸するに至るが如き、社會主義的の社會に在つては、一部階級が他の階級に對して有し得べき處の特權も獨占關係も、共に存在し得ざるに至るであらう。即ち生産手段の増加及び生産技術の完成より生ずる利益は、社會全體の均霑する處であつて唯一般的に労働時間を短縮し欲望充足を大ならしむるの結果を來すのである。此の如き社會狀態の下に於いては地代及び利子は形成せられ得ざるもので、資本は唯一定の歴史的條件の存する時に於いてのみ存在し得るものなる事は、社會主義理論の特に高調する處で、此點は吾人は正當なる理論として肯定せざるを得ないのである。以上論ずる處よりして資本概念に對しては異なる二つの意義を與へ得ざる事を知り得るであらう。即ちRohdertus及びWagner之れに附隨する處の多くの經濟學者の説きしが如くに、資本を以つて具體的の生産手段となし、私有財産制度に對立せしむるが如き之れである。彼等は前者を以つて純粹の經濟的範疇となし後者を歴史的法律的範疇として觀察するものなるが、吾人の考ふる處に隨へば、之は誤謬にして議論を迷宮化せしむる處の觀察點なりとすべきである。資本は經濟的觀點の下に於いて、一定の歴史的條件に依つて決定せらるる社會的範疇に屬するものとすべからず、此の社會的關係が資本を特質付け又其の本質を造り出すに至るのである。勿論之れに依つて資本の經濟的概念を其の法律的觀念より分離せしむるのではない。二個の觀察點よりして、同一の社會的事實—永續性的の財貨の所有に由つて創造せらるる獨占關係—は解

る所有關係を保護するを目的とし、經濟は財貨を以つて吾人の物質的慾望を充足せしむるを目的となすのである。されば資本概念は法律的に觀察すれば、一定の範圍内に於いて財貨を自由に且つ他より妨げらるる事なくして使用處分し得るの手段なりと見るべく、之れを經濟的に觀察する時に於ては、消費利得を大ならしむ事を得べき財貨の一群なりと見るべきである。兩者共に一定財貨の所有よりして生じ得べき獨占關係なる同一の現象を對象とし居るもので、恰も殺人なる事實を法律的醫學的動物學的心理学的何れの觀察點に立ちて研究するやを論ぜず、他人に依つて故意になさるる生命の消滅なる同一の事實を取扱ふものなると同様と見るべきである。資本概念を技術的意義に解して生産せられたる生産手段の總てなりとなす時には、封鎖的經濟又は社會主義的經濟に於ける資本を意味するに過ぎない。生産手段の所有が生み出す處の財貨の餘剩獲得は技術的事實であつて、其の説明は之れを自然科学に於いて求むべきものであらう。此の如き單なる技術的事實は交換經濟が貨幣經濟に進化するに至れる時、初めて社會的事實と化するに至るのである。即ち貨幣經濟に於いて一定の生産手段が有する技術的特質に因つて社會的依據關係なるものが發生するに至る。一定の社會的歴史的に定まる條件の下に於いて行はるる處の變化によつて、初めて吾人の學問的興味の対象となり得る、社會現象が生じ来るものである。されば資本の餘剩利得を生産手段の餘剩價值を創造する内在的の力に歸せしむる處の加算理論(Zurechnungstheorie)は、利潤現象が畢竟す

るに技術的事實に非ずして社會的事實なるが故に、決して満足なる解決を供し得るものではない。利潤なる觀念は常に資本概念の根底をなすものである。各個の個別經濟に於いては、人人は自己の節約せし勞働の果實を獲得するものなるに反して、交換經濟に於いては他人の勞働の果實を獲得するものである。資本なる語は技術的に解して生産手段なりとして使用し得るやも知れないが、資本が國民經濟學の對象となり得るのは資本の所有に依つて社會的依存關係の發生する場合に於いて、初めて然りとなし得べきである。一定財貨が經濟的意味に於いて資本となり得るが爲めには以後資本なる語を使用する時は常に經濟的意味に於けるものなりと知るべし。次の條件を必要となすのである。

- (一) 經濟的財貨なる事
- (二) 利得獲得の目的にて利用せんとする經濟主體の所有に屬する事
- (三) 利得は交換行為によつて、換言すれば貨幣の介入する事によつて獲得せらるるものなる事。

されば資本概念は次の物を内容とす。

(一) 總ての物質的財貨。其の生産には何等かの意味に於いて勞働を必要とし且つ生産行程又は流通行程に存在するの財貨。

之れに屬するものとして次の如き種類を擧ぐる事が出来る。

(イ) 原料及び補助材料。土地より生産せられたるもの、勞働力によつて採掘せられたる石炭人の手に依つて蒔かれたる穀物及び棉花、其他其の生産に何等かの人間勞力を必要とせし原料。

(ロ) 生産手段、技術的意味に於ける生産手段即ち器具機械工業的農業的施設—土地自體に包含し盡されざる生産的の土地改良設備。

(ハ) 事業家の手に在る處の商品の蓄積。原料生産手段の所有は永續的なるに反して、消費せられべき商品の所有は一時的なるが故に此等の所有は一般に獨占關係を創造し得ざるが如くに見ゆべし、隨つて多くの經濟學者に依つて商品の蓄積は資本たり得るやの疑問を提出せられたのである。然し之れを慎重に考察する時には、此場合に於いても獨占關係は存在するもので、而も二つの意味に於いて存在するものなる事は疑を容るるの餘地がない第一商人が大なる貨幣資本を有する事に由つて、自ら大量の商品を引き受けて、事業家に規則正しく且つ連續的に生産業を遂行するせざるに必要な、購買力を供するに云ふ理由に基くもので、即ち商人は生産者に對しては貨幣的獨占を有するのである。第二商人は消費者に對して獨占的地位を有するもので、之れに由つて商人は生産者—消費者との間に仲介的職責を盡すものである。而して之は商人が消費者の慾望を知悉するに云ふ點に一部は基くものである。現代商人の技能—商人の實行し又之れを學問化せしむるに至りしものは市場を支配するに云ふ點に存するもので、商人は之れを以つて自己の職務とすに至つたものである。現在經濟生活の特質は商人の職務を—市場に於いて消費者に財貨を持ち來す事—有利なるものと觀せしむるに至り、商人が市場を支配し得るに至る時には、即ち商人は生産者を自己に隷屬せしむるものたるに至らしむるのである。消費者は生産者に行き

て直接商品の供給を受くる事は不可能にして商品を消費者に運び又慾望の種類に應じて商品を類別して供給する處の、商人の仲介を必要とするに至るのである。商品分配機關を必要とする經濟的要求は、該機關の代表者たる處の商人に對して獨占的地位に類する特權的地位を附與する事となるのである。此等仲介的地位を事業家自ら之れをなす場合もあり得る。例へば旅宿業料理屋温泉病院葬儀場等に之れに屬するもので、之等の事業は總て直ちに消費せられべき財貨を、消費者に供するの職務を有するのである。

(ニ) 永續的享樂財貨は資本財貨の第四類をなすもので、此等財貨の所有者は商品の所有者と等しく消費者に對して財貨の分配的職能をなす場合に於いて、此等財貨は又資本となり得るのである。分割して使用し得べき財貨の分配例へば貸家屋圖書館の如きもの、分割するを得ざれども時間を限りて各人に同一物を使用せしめ得るもの貸馬貸ピアノの如きもの二種が存在す。此等財貨が所有者自らに依つて使用せらるる時は、其の資本たる性質を失ふに至るべく、之等の所有者が他の消費者に對して一時的に使用を許可する場合に於いては、資本となり得るのである。消費者の手に存在する享樂財も、之れを欲する他の消費者に一時的に使用を許可する場合に於いては又資本となり得るのである。即ち戰爭中屢屢吾人は現在自ら使用せる靴又は衣服を賃貸する旨の廣告を、目撃せしは以上の場合の實例なりとすべきである。以上種種なる場合に於いても他の總ての資本現象に於けるに等しく、一定財貨の所有より生ずる特權的地位を、利

得獲得の目的にて利用するに云ふ同一の關係が存在するものであつて、唯此等總ての場合に於いて、資本は財貨自體を意味するには非ずして、人人の間に於ける關係を意味するものなる事を知るは緊要なる事である。資本を資本たらしむる處の社會的關係は、工場經營に於ける利潤獲得なる複雑なる現象に於けるご等しく、單なる財貨の貸出に於いても常に存在するものなる事實を注意すべきである。

(本)最後に鐵道船舶車輛倉庫等の交通機關も亦、資本概念の中に包含せらるべきである。

以上列舉せし資本財の總ての種類に就きて見るに、其の共通的特質として總て勞動の生産物なる事を知らなければならぬ。之れに依つて資本財は土地より區別せらるべきものである。無論土地の所有に就きても上記の資本財の場合と同様な社會關係即ち獨占關係の存在するは明白なれども、土地は研究方法の必要上他の資本財に區別せらるべきものである。此の兩者の區別は經濟學者の一般に採用する處であるが、之は決して土地と資本財との間に本質的に差異の存するが故でない事は注意すべきである。

(二)資本財貨の第二類としては、非物質的なる財貨の一定種類を數へなければならぬ。即ち普通法律に依據し法律に依つて保證せらるる法律上の權利は之れに屬するのである。

(イ)生産に必要な非物質的技術的補助手段例へば特許權の加し。

(オ)法律に依つて許容せられたる特權にして生産手段の所有者の優越的地位を益明白ならしむるもの、例へば人爲的の獨占及び免許の如し。

(三)法律に依るに非ざれども一定事業の社會的に認めらるる優越性、即ち該生産事業の生産品の品質に對する處の社會一般の信認

(本)第三者より勤勞又は財貨の給付を要求し得る權利、即ち勤勞財貨貨幣の要求權にして普通契約より生ずる債權を意味し、後述する處よりして明白なるに至るが如くに貨幣も亦此の中に包含せらるべきである。

最後に擧げたる權利に就きて見るに、其は價值自體を獨立せしめて其の對象となすものではなくして、其の背後に存在する處の具體的財貨の具象を其の目的とするのである。

以上列舉せし總ての關係に就きて、其の共通の觀念は特權に求むべく、經濟生活に於いて一階級が他の階級に對して有する優越的地位を表現するものにして、物質的財貨の所有よりして生ずる、既存の權利關係を一層強むるに過ぎないものである。

上述の物質的及び非物質的財貨が資本たり得るが爲めには、其の所有者が利得即ち餘剩効用を其れよりして獲得せんとするの意圖を有する事を必要とするのである。此の如き資本財貨の具體的所有に加ふるに、之れを基として事業家階級之れに隸屬する階級との間の權力關係をして獨占化せしむるが爲めには所有者の特別な資本主義的精神の附加を必要とするのである。資本主義的精神はSommer-Lohmに隨へば、資本主義的企業家に特有するものと認むる事を得べき精神活動の全體を總稱するもので、營利的努力計量的精神經濟的帝國主義之れである。資本主義をして可能ならしむるが爲めには、經濟的帝國主義を人格化せるものとして、古典經濟學者の所謂經濟

人なるものを考ふるも、何等怪しむに足らない。資本主義的企業家の活動は其の精髓は損益の計算に求むべく、所有なる客觀的條件の存在するに同時に、所有者が自己の優越的地位を利用せんとするの主觀的意圖の存在する處には、資本は常に存在し得るものである。

營利經濟的目的の遂行は、上に列記せし經濟財貨の所有に就きて表はれ来るのみではなく、又一定の優越的地位を齎す事を得べき處の他の非物質的財貨の所有に於いても、之れを見る事を得べきである。之れに屬する第一のものとしては、取得せし知識例へば醫術法律及び工業的技術の如きを擧ぐべきである。

之等の知識は個人に依つてか又は病院法律事務所工務所等の資本主義的企業に依つてか營利の目的にて利用せられ得る。第二として繪畫歌謠演劇等の才能を擧ぐる事が出来る。之等は美術館展覽會劇場曲馬場等に於いて營利的に利用する事を得べきである。文藝院旅行案内所通信社新聞社職業紹介所等も亦、非物質的財貨の資本主義的利用に基くものである。此等總ての事業に共通的特質は、一定の知識才能及び勤勞給付等を綜合して、之れを一般社會に供給するの點に存在するものであつて、之等を必要とする處の一般の公衆に對して、一種の獨占關係を有するに至るものなるを知らなければならぬ。

一定種類の非物質的財貨が資本となり得るの理由は、其等の所有者に依つて營利經濟的に利用せらるるに由るものであつて、一定の經濟財貨が其の資本性を喪失するのは、其の所有者が之れを利得を獲得するが爲めに利用せざる場合に、生じ来るものである。國家地

方團體及び或る種の組合の經濟行爲—勤勞の給付(運送)公有地鑛山の利用等—が一般社會の爲めに公共的利益を目的として行はるる場合に於いては、非資本主義的のものとして觀察すべきものであり、反之若し國家の行爲が財政的特質を示して國家收入の増加を目的として行はるる場合には、個人的所有者の資本主義的活動と何等區別せらるべき所はない。

國家は國庫の形式にて資本主義的企業家より得るのである。若し此の場合國家が一般社會の利益消費者の利益の爲めに、即ち價格の引き下げ又は利得を一般の福利の爲めに利用するに於いては、其の範圍内に於いて國家の經濟は其の資本主義的色彩を失ふに至るものである。然し各個の場合に於いて、國家の利己的活動と公共的活動とを明確に區別する事は困難である。消費組合に在つては其の資本主義的特質は、殆んど滅失して居るもので組合員の利益の爲めに活動する處の消費者の團體に依つて、財貨の流通行程の一部即ち財貨の分配は行はるるものである。消費者自らが自己の慾望充足に必要な財貨を購買し、之れを分配する事に依つて、消費者と財貨分配者—商人—との間に存する、利害の衝突は消失するに至るであらう。消費組合の行爲は營利的なるものではない。若し營利的なるに於いては、組合員を搾取するの結果を來し、隨つて組合自體の目的に反する事となるに至るであらう。されば消費組合及び或る種の公共的組合は外觀上は、資本主義的企業として經營するが如くに見ゆるに雖も、其の内容に至つては、其の經濟行爲が一般的利害なる動機に導かれて行はるるものなるが故に、資本主

義的精神は全然之れを有せざるものと見なければならぬ。一般の福利施設を目的とする公益組合に就きても以上の事は適用し得べきものであつて、假令經濟的財貨を所有し之れを經濟的に利用するに雖も、其等の目的とする處は、營利には非ずして愛他的行爲に存するものなるが故に、之れを以つて資本主義的企業なりと見ざるものである。

經濟的企業中に於いて保險會社は特有の地位を占むるものであつて、社會に對する其の經濟行爲は不慮の事件より生じ來る、經濟的損害を決議するの點に存するものである。保險事業に依つて利益を圖らんとする私的の保險會社なるや又は公共的の下に營む國營保險企業なるやに隨つて、保險事業は或る場合には資本主義的企業と見るべく、他の場合には非資本主義的企業なりと觀察しなければならぬ。

資本主義的企業の他の種類、即ち銀行及び信用機關に就きては、貨幣資本の説明に際して詳細に論ずるであらう。

Walras, Hermann, B. Bawert 等多數の學者は、資本の特質を規則正しく廻期的に利得を齎すの點に、求むるものなりと雖も、之れに對しては、假令一回限り生ずる利得に就きても、資本主義的利得なりと稱するに差支なき事を、指示しなければならぬ。衣服の賣却に際しても亦、書籍の貸出に於いても、同様に餘利利得の生じ來るものであつて、唯此際重要な事は、社會的從屬關係を基礎として利得の生ずるの點である。

資本財貨が資本となり得るが爲めには、營利が財貨所有の動機たるのみを以つてしては

足れりとはなし得ない。更に第三の要因とし交換行爲に依つて利得を獲得するものなる事即ち貨幣の仲介を必要とするの事實を擧げなければならぬ。此の場合貨幣が現實に餘剩財貨に變化する事は、必ずしも必要とせざるが故に、唯何時にても貨幣を財貨に換へ得るの可能だに存在すれば足るのである。Max

Waldが經濟流通に於ける對象となり得べき所有權の目的物が、人人に依つて流通經濟的營利に利用せられ得る處の經濟的事實として資本主義的經濟なるものは解すべきものと見て居るのは正當なる議論と見るべきである。資本概念の下に於いては、財貨の流通に於いて利得獲得の目的に役立つ事を得べき財貨なりと、解して可なるものである。農夫が地主の爲めに勞働をなすの必要に迫られ、他方自己の慾望は自己の家内經濟内に於いて充足しつつあるが如き、自然經濟の存続しつつある限りに於いては、資本の根基をなす處の獨占關係は生じ來ないもので、總ての經濟人が依據關係に立つ處の交換經濟に於いて又之れを通じてのみ、一つの經濟主體が他の經濟主體に隸屬するの關係が生じ來るのである。

上述の説明よりして吾人は資本の經濟的概念を、次の如く定義せんとするのである。獨占關係を造り出し、之れに依つて所有者をして無產者よりして、貨幣形式の下に於いて、利得獲得を可能ならしむるが如き、勞働に由つて創造せられたる財貨及び社會的規範に依り吾人に許容せられたる權利である。資本概念を正確に了解したる後に於いて、初めて本論の目的とする處の主要問題、即ち貨幣は資本となり得るや而して何故に然るや

この問題に對して、解答を與ふる事可能となり得るに至るべきであらう。

貨幣とは購買力の大きさを示す處の抽象的單位なりとは、吾人の既に知る處である。國民經濟に於ける貨幣單位の數量は、信用機關の發達及び國家財政の需要に應じて左右せられて、自由が増加し得るものなれども各個人が所有し得る貨幣量は常に限定せられ居るのである。各人は全體の貨幣存在量の一小部分を自ら獲得するもので、其の獲得量は彼れの給付能力及び權力的地位に對して一定關係の下に於いて、之れを決するものである。人人の有する給付能力及び權力的地位が限定せらるる結果として、又彼れの有し得べき貨幣量も限定的たるものである。通貨の膨脹に於いて生ずる貨幣的表券の無制限の増加は、貨幣の購買力の無制限の増加を齎すものではない。貨幣に對する關係に於いて、貨幣量の増加は財貨の貨幣價值を騰貴せしむるに至るべく、隨つて、人人の購買力は貨幣存在量の増加に依つて何等影響せらるるものではない。

經濟財貨が慾求せらるるは其の存在量の稀少性に基くものなるに等しく、貨幣も其の存在量の稀少なるに由つて慾求せらるるものにして、殊に貨幣經濟の下に於いては、財貨の世界に侵入し得る唯一の鍵は貨幣なるが故に貨幣に對する慾求は益大ならざるを得ないものである。全體として考ふれば貨幣の存在量は、發行に由る專斷的の増加とは、何等關係なきものであつて、其は存在する財貨量に對してのみ關係する處あるものである。隨つて貨幣の購買力は常に限定せられて居る。貨幣に於いて表現せらるる處の購買力は、購買

せらるべき財貨の存在量が限定せらるるものなるが故に、又限定せらるるものである。各個の經濟主體よりして考察すれば、貨幣は其の存在量の稀少性に基きて價值を有するもので、隨つて貨幣は獨占の目的物となり、貨幣の所有は獨占關係を創造し、獨占者は之れを利得獲得の目的にて、之れを利用せんとするのである。貨幣手段の利用は、之れを他人に貸付の形式に於いて讓渡する事に於いて生ずるものにして、貨幣の貸借に於いて一方が他方に對して有する優越的の力が表現せらるるのである。之れ貨幣貸借に於いて、貨幣の所有者は貨幣を必要とするものよりして、貨幣利子の形式に於いて貨幣の効用を獲得するものである。銀行の存在は各人の所有する貨幣を化して、資本となりしむるの可能性を供するに至るものである。

信用が單なる貨幣手段を資本と化せしむるの能力に就きて Hilferding が「信用に由る遊資の現實的貨幣資本への變化」なる章に於いて論述して居る。Marx に於けるに等しく彼れも亦遊資なるものは存在する事を得ずして遊資即ち現實に使用せられざる貨幣手段は、信用に依つて初めて資本と化し得べきものなりと考へて居る。之れに依つて彼等は、一般的には貨幣資本の形態は一あるのみにして、其は貸付資本であり、Marx 理論に於いて見る處の他の貨幣資本形態、即ち純粹の貨幣資本なるものは生じ來らない事を明白にして居る。Wagner も彼れを觀察點を等しくなし、貨幣資本の主たる否な唯一の形態は貸付資本にして、以つて貨幣經濟に於ける真正の意味の信用取引の目的物となり得るのである。

(第一七頁に續く)

學内報

定時專任教員會開催

去月二十四日午後三時から千里山學舎教授室に於て定時專任教員會を開催し、本學年度學年試験に關する件、學生指導に關する件等を議し午後五時頃散會した。

學部及び専門部 卒業試験施行

本學學部及び専門部の卒業學年は何れも去月上旬を以て授業を打ち切り爾後引續き卒業試験を施行、本月四日終了した。

本學年度授業終了

本學大學豫科及び専門部第一、二學年の本學年度授業は何れも去月末日を以て終了し、引き続き學年試験を施行しつつある、因に右學年試験は本月中旬を以て全部を終るこゝになつてゐる。

沖中教授轉住

本學教授沖中恆幸氏は今回左記の場所へ轉住した。

豊能郡豊津村字垂水千里山花壇前第六號

住友評議員逝去

本月評議員男爵住友吉左衛門氏は豫てから病氣のため兵庫縣武庫郡反高林の別邸にて靜養中のこゝろ本月二日午後三時遂に永眠されたこゝに謹んで哀悼の意を表する次第である。

スミス「國富論出版」百五十年

記念經濟學者肖像展覽會

經濟學の鼻祖アダム・スミス不朽の著「國富論 (An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations) が公にされてから、恰も百五十年に相當する本月九日を以て前號豫報の如く、本學内經濟學專攻の有志から成る關西大學經濟學會主催、大阪朝日新聞社後援の下に、右刊行百五十年記念事業が催された。その一は本月七日より九日までの三日間、市内東區博勢町、株式會社丸善大阪支店樓上に於ける歐米古今の經濟學者肖像展覽會の開催で、何分大阪に於ては未曾有の催である上に、幸ひ會期中を通じて好天候であつたため、非常の盛況を呈し、好學の市民に多大の感興を與へた。

肖像は森下教授がウィスコンシン大學在學當時蒐集して本學に寄贈されたもの、最近宮島教授に歐米の諸學者から贈られたもの、武内教授がドイツから購ひ來られたもの、岩崎教授が南歐の諸學者を訪問して自ら撮影して來られたもの等、當に經濟學者のみならず、斯學に關係深き哲學者、社會學者等をも網羅して約二百五十點を數へ、中にはキヤナン教授が自ら多衆撮影中から切り取つて送られたものを初め、到底尋常では目にし難き珍物も少くなかつた。來觀者は毎日千數百名宛に達し、關大阪市長、谷田大阪控訴院長等の顔も見え、本學山岡總理事も態態參觀した。因に展覽に供した肖像の主なるものは左の通りで、中顯著なるもの十數葉を記念繪葉書にして來觀者に頒布した。

- Smith, A. (1723-1790)
- Malthus, T. R. (1766-1834)
- Ricardo, D. (1772-1823)
- Mill, J. S. (1806-1873)
- Senior, N. W. (1790-1864)

- Marshall, A. (1842-1924)
- Smart, W. (1833-1915)
- Cannan, E. (1861-)
- List, F. (1789-1846)
- Roscher, W. (1817-1894)
- Hildebrand, B. (1812-1878)
- Knies, K. G. A. (1821-1898)
- Marx, K. (1818-1883)
- Wagner, A. (1835-1917)
- Schnoller, G. (1836-1917)
- Conrad, J. (1839-1915)
- Mayer, G. V. (1841-1952)
- Brentano, L. (1844-)
- Bücher, K. (1847-)
- Liefmann, R. (1874-)
- Stolzmann, R. (1852-)
- Menger, C. (1840-1921)
- Böhm-Bawerk, E. V. (1851-1914)
- Wieser, F. F. V. (1851-)
- Colbert, T. J. (1851-1883)
- Quensay, T. (1694-1774)
- Turgot, A.-T.-T. (1727-1781)
- Say, J. B. (1767-1832)
- Bastiat, F. (1801-1850)
- Gide, Ch. (1847-)
- Carey, H. C. (1793-1879)
- George, H. (1839-1895)
- Walker, F. A. (1840-1897)
- Clark, J. B. (1847-)
- Ely, R. T. (1854-)
- Tausig, F. W. (1859-)
- Seligman, E. R. A. (1861-)
- Carver, T. N. (1865-)
- Fisher, I. (1867-)
- Commons, J. R. (1862-)
- Petty, W. (1623-1687)
- Hume, D. (1711-1776)
- Young, A. (1741-1820)
- Bentham, J. (1748-1832)
- Owen, R. (1771-1858)
- Mill, J. (1773-1836)
- Jones, R. (1790-1855)
- Darwin, C. R. (1809-1882)
- Ruskin, J. (1819-1900)
- Spencer, H. (1820-1903)
- Bagehot, W. (1826-1877)

- Thünen, J. H. V. (1783-1850)
- Lassalle, F. (1825-1864)
- Engels, F. (1820-1895)
- Sismondi, L. (1773-1842)
- Sully, M. de B. (1539-1641)
- Saint-Simon, C. H. (1766-1825)
- Fourier, Ch. (1772-1837)
- Enfantin, B.-P.-. (1796-1864)
- Comte, A. (1798-1858)
- Proudhon, P. J. (1809-1865)
- Tarde, G. (1843-1904)
- Quetelet, A. (1796-1874)
- Giddings, F. H. (1857-)
- Small, A. W. (1854-)
- Ross, E. A. (1866-)

尙ほこの機會に今回の企てに對し有力なる後援を添ふした大阪朝日新聞社及び終始多大の御骨折を願つた丸善八田支店長、山本宣傳部主任その他各位の御厚情を深く謝する次第である。

スミス「國富論」出版百五十年

記念晚餐會

前項記載關西大學經濟學會に依り開催された今一つの記念事業は、「國富論」出版の當日即ち本月九日午後五時から大阪ビルディング樓上に於けるスミス「國富論」出版百五十年記念晚餐會であつた。

定刻この企てに賛同して出席した本學教職員三十餘名、先づ沖中教授は主催者を代表して挨拶を述べ、會員戶田省三氏は「アダム・スミスの傳記」に就き、同じく辰巳經世氏は「經濟學史上に於けるアダム・スミスの地位」に就き何れも約二十分間に亙る簡單なる講演を試み一同食卓を共にして、碩學を偲ぶ交談に時を費し午後九時盛會裡に散會した。

校友の面影

辯護士 黒田莊次郎氏

明治二十二年法律學校出身

知る人ぞ知る、氏は浪六の『當世五人男』の一人黒田健次のモデルと名高い。一見あの覇氣満満、稚氣横溢の青年黒田が若き日の此人かと思はれるやうな好好爺であるが一度口を開けば其語尾にひらめく精悍の氣は尙よく往年の書生つづりを思はずもがある。

『私は堺の生れで今の第三高等學校が大阪にあつて官立中學と稱して居つた頃在學して居りました。其處を出て關西大學に這入るまで流浪生活をやりましたが、其間のことで小説に書かれたりしたのは……』

氏は斯くて本學第一回の卒業生として世に出るや更に筈を東都に負ふて一層の研鑽を積み明治二十四年に辯護士試験をパスして其後三年間東京及び大阪で辯護士事務所を開いてゐた。二十八年判事となり米子、田邊、神戸の各裁判所に職を捧じたが、超えて三十二年行政官たらんとして果さず、官を抛つて再び野に下り大阪に辯護士を開業して以て今日に及ぶ。其永き辯護士生活を通じて氏の面目を如實に物語るものは氏が其本職たる法律事務に専念する以外、政治運動や實業等には一切關係せざるに過ぎない。従つて氏の行き方は極めて地味であつて當世流の華華しさはないが分業が社會組織の原則である今日、人各自らの職務に勵んでみだりに他の領分を犯さないことが、國家社會に對して最も忠なる所以で

あることは多言を要せざるに過ぎ、氏の主義も亦此信念に發すること勿論である。老いて益鏗鏘、仕事に於いても石井の破産事件を引受けて頭の冴を見せてゐる氏は、家庭に於いては數人の子女の善良なる父として幸福な生活を送つてゐる。父君の跡を承けて三高に入り、大學に學んで居る令息等がやがて第二世



黒田として實際社會に濶歩する時も遠くはないであらう好物の酒盃を手に目を細くして吾子の成業を眺める氏の温顔が眼前に浮ぶ心地がする。暫く共に氏が日常生活の一端を聞かう。

『私は外の仕事に手を出さない代りに本を讀みます。勿論職業柄法律に關するものを多く讀むのは止むを得ませんが併し文藝でも宗教でも工業、農業に關する本でも殆ど手當り次第に涉獵します。殊にサイエンスが好きで天文や地質の本にまで手を延しますが、かう云ふ風に廣く讀むに云ふ事は一面職業上の必要でもあるのです。私は

常から問題に當るに其法律關係を法文や契約條項のみで考へないで更に其技術的、經濟的方面的關係をも深く研究し度いくせを持つてゐます。そんなことで船舶の書物や鑛山の本を盛に研究したこともありました。かう云ふ風に多讀はしますが其代り其一一を深く考へ説の正否について自分自身の判断や批評を下して行くことはしない主義です。法律書だけは讀むに必ず索引を作つて行きますが判断を加へないことは同じであります。唯必要があつた場合多くの議論を讀み合せて最後に自分の結論に到着するに云ふ方法をこつてゐます。

黒田莊次郎氏(上)
大原敬藏氏(下)



さうでなくて一つ一つの説に結論を下して行かうとするに早くから自分の頭が固定してしまつて他の説の眞意義を充分に受け容れることが出来ない憾みがあるからです。要するに多讀而して頭を固めない主義でも云ひませうか。』

辯護士 大原敬藏氏

明治二十三年法律學校出身

氏は明治三年兵庫縣飾磨郡谷内村に生れ、年十八歳の時志を立てて大阪に出て始め上成學校に入つたが、同校で老辯護士阿曾留恆富氏の刑法の講義を聴いて、法律學に對する趣味を感じ本學に入學した。二十三年第二回の卒業生として出づるや暫時にして代言人の試験にパスし氏の言によれば『明治二十五年歳二十三の元旦より法律で飯を食ひ始めた』のである。最初大阪の若松町に事務所を開いたが居るに六年、岡山區裁判所判事に任ぜられ在任一年にして檢事に轉じ姫路、和歌山、京都、富山、四日市、岡崎、名古屋の各裁判所に約十五六年間捧職したが大正三年官を辭して名古屋市東區武平町四丁目一六に法律事務所を開き以て今日に及んでゐる。

氏は性格として生殺半分のことが大嫌ひで凡て徹底主義を以て押し通し、職業についても徹底的に本職を遂行する以外政治等には一切關係せずひたすら自らの道を進んでゐる。動機は多少異なるが前掲の黒田莊次郎氏の主義の結果に於いて全然一致してゐるに奇も稱し得る。民事よりも寧ろ刑事を得意とし其性格よりして所信に堂堂と邁往する爲めに時に官邊の忌諱に觸れることはあるが、しかし持前の徹底主義は決して廢さぬは氏の言である。

氏は又趣味として義太夫をよくし、碁も亦其技堂に入れるものあり時に鯨釣りに興ずることもあるが、或ひは人情の機微を教へ或ひは攻防の策戦に三寸舌頭の勝敗を觀せしめ、或ひは暫く人事の雜念を去つて自然に悠遊し得

等、何れも法律事務に従ふ者の趣味として誠に適切なるものである。
年齢に五十七、私人として又公人として圓熟老練の境は寧ろ今後にある。其自重と健闘を祈つて止まない。

終りに氏が特に申し送られた學生時代の回顧談を左に摘録する。
『私は第二回の卒業生であるが在學當時學生の数は僅僅五六十人で、河内町興正寺の本堂に暗薄いランプを灯し、脚のガタガタする机に向つて筆記したものである。諸先生は何れも特志で教鞭を執つて居られる人人であるから其講義も誠に熱心懇切を極めた。先づ井上操先生は大井憲太郎事件の裁判長として有名であるが常に徒歩で紫色の風呂敷包を抱へて登校され、『エーもう一つ云つて置きます』を連發しつつ講義は娓娓として盡きず遂に『えもう一つ先生』の綽名を贏ち得られた。小倉久先生はフランス歸りの新知識でコード・ナボレオン、モンテスキュー、アコラス等の言葉

を卷舌で何遍も云はれる、私共は『アコラス先生』と呼んだものだ。澁川先生は賣買法を擔任せられてゐたが御國訛の雲州辯丸出しで賣買を『バエバエ』又は『ペーペー』と發音せられ誰とも知らず『ペーペー先生』と呼ばれた位で筆記には随分困つたものである。
手塚太郎先生は當時最年少の先生で大きな眼鏡をかけ江戸っ子辯で奇想天外より落つる底の調子を以て刑法を講義せられ大向ふの學生をヤンヤと云はせられたものである。水上先生は雄辯滔滔無慮千萬言を費し而も漸く結論に達せんころで『イヤ今のは間違だ元へ……』と更に改めて講義が始る云ふ有

様でいつも筆記が滅茶滅茶になつた。堀田先生は眞に能辯辯辯の士で五枚の羽織に大房の白紐、右手に白扇を握り咳一咳して講義が始まる云ふ譯で私共は常に其雄辯に酔はされたものであつた。かうした時代を廻想して現在の關西大學に思ひ到る誠に今昔の感に堪えないものがあり、よく今日の盛大を致す爲めに粉骨碎身の勞を惜まれなかつた歴代の理事者並び現當局者に新なる感謝の念を禁ずるところが出来ない云云。

校友彙報

校友動靜

濱名慶次郎氏(大ニ四專經) 今回市内東區安土町二丁目野村證券株式會社に入社。
宮本勇男氏(大ニ三法) 小樽市北海道銀行本店に勤務中である。
清水郡造氏(大七法) 日清火災海上保險株式會社本店に勤務中。
淺井 明氏(大ニ二經) 安田貯蓄銀行京都支店御旅町派出所勤務中。
井波義吉氏(大ニ三法) 大阪府富田林警察署に署長として在勤中のところ今回警察部高等課長心得に榮轉した。
日高 勇氏(明四五法) 八尾警察署長から富田林警察署長に轉任。
眞木益太郎氏(大ニ一法) 茨木警察署吹田分署長在勤中のところ今回警察部衛生課勤務に轉ず。
田中曾藏氏(大ニ〇法) 大阪府警察部特別高等課に警部補として在勤中のところ今回警

部に昇進す。
加茂 實氏(大ニ四專商) 日本電力株式會社庶務課に在勤中。
増田定治氏(大ニ三經) 京都美術時繪學校設立に協力し現に同校講師在任中。
片山光太郎氏(大ニ二法) 東京市本郷區森川町青木法律事務所に於て辯護士事務に従事。
小村雅彦氏(大七法) 尼崎警察署在勤中。
田路良一氏(大五法) 大阪合同紡績株式會社神崎支店在勤中のところ今回同社天満支店に轉任。

校友住所移動

佐伯三郎氏(大ニ四專經) 港區新池田町二丁目一六波邊正方
濱名慶次郎氏(大ニ四專經) 東區安土町二丁目野村證券株式會社
宮本勇男氏(大ニ三法) 小樽市富岡町二丁目六五中原正治方
小曳陽市氏(大七法) 府下京阪電車沿線香里櫻ヶ丘
清水郡造氏(大ニ一法) 東淀川區十三西町二二八小泉要三氏(大ニ〇法) 東成區岡ノ町一六
近藤政士氏(大ニ三經) 兵庫縣武庫今津町東辰畑一二六七
淺井 明氏(大ニ二經) 京都市下京區四條通寺町東入御旅町安田貯蓄銀行京都支店御旅町派出所
小林 一氏(大ニ〇商) 北海道留萌港瀨越通八一
竹村熊二郎氏(大ニ二經) 北區小松原町七五
井上 孟氏(大ニ三經) 西淀川區大仁町九二
吉村謙治氏(大ニ五經) 西成區玉出町四八〇
玉井磨輔氏(大ニ二經) 東京市牛込區矢來町四ノ四三

校友改姓名

加茂 實(大ニ四專商) 港區古川町二一
片岡 博(大ニ三經) 神戸市平田町二丁目二ノ一七
奥田正雄(同) 兵庫縣武庫郡西灘村畑原字クバノモト三二七
片山光太郎(大ニ二法) 東京市本郷區森川町一青木正巳方
小川成雄(大ニ一商) 港區富島町六八共成合資會社
河村宣介(大ニ〇商) 南海本線萩ノ茶屋西一丁西萩町三八九中村ツル方
森田仁一(大ニ三商) 住吉區天王寺町北天下茶屋生田筋四五八
新留嘉吉(大ニ九法) 鹿兒島市平之島四番地
富家逸郎太(大ニ五法) 北河内郡古宮村大字濱田路良一氏(大五法) 東區島町二丁目一九
岡田善男(大ニ四專法) 此花區上福島北二丁目八三日本メソヂスト福島教會青年ホーム内
平工威夫(大ニ二法) 東淀川區柴島町三九一
綾木茂太郎(大ニ四專法) 鳥取縣八頭郡山形村
中上正雄(大ニ一商) 東成區野江町二丁目四七七

校友逝去

大正十五年二月八日
明石市大明石村四〇二
公證人 遠 藤 忠 男 氏
明治二十七年法律學科卒業
右訃音に接し謹んで弔意を表す

校友諸氏ニ告グ

一卒業式御案内

本學部第二回並專門部第三十六回卒業證書授與式左記ノ通舉行致候間御臨席被成下度此段御案内申上候

一、大正十五年三月二十日(水)午後二時

於本學福島學舎

二校友大會御案内

本年度新卒業生歡迎旁左記ノ通校友大會相催候間何卒御出席被成下度此段御案内申上候

一、大正十五年三月二十日午後五時

於市内中之島中央公會堂大集會室

一、會費金四圓(當日御持參ノコト)向未午御手数御出席ノ有無來ル十五日迄ニ大阪市上福島關西大學秘書課宛御一報願上候

關西大學

學生彙報

千里山辯論部報

辯士派遣 千里山學友會辯論部では其後左記の通り辯士を派遣した。

一月二十四日 大阪高等工業學校雄辯大會へ

法一 八澤 俱 好君
豫二 中石 清 一君

二月十三日 叡山學院雄辯大會へ

法一 清水 政 秀君

學内雄辯大會 去る二月十日午後一時から第九教室に於いて學内雄辯大會を開催した。プログラムは次の通りであつた。

一開會の辭

一國防の民衆化

一國民覺醒の時

一私學徒の叫び

一無階級の政治運動

一憲法第二十四條を論ず

一司會者挨拶

一學生スピリットの高調

一切捨御免

一姦通罪を論ず

一支那動亂の影響

一軍事教育を受けて

一閉會の辭

豫二 加藤 昌 秀君
豫一 進 正 男君
豫二 村 田 定 一君
豫二 田 中 義 雄君
豫二 田 中 基 次君
法一 八澤 俱 好君
法一 榎 本 信 夫君
經一 増 子 一 巳君
豫二 和 田 二 郎君
法一 清 水 政 秀君
法一 藪 下 益 治君
豫三 萩 原 清 治君
法一 清 水 政 秀君
軍事教官 横 卷 大 佐
豫二 中石 清 一君

第九回工業見學

大正十五年二月三日第九回工業見學として河村講師、中村教授、横卷教官以下見學團一行は市内南區南日東町精版印刷株式會社へ赴いた

同社は大阪否本邦に於ける精版印刷の權威であつて、嘗て關東大震災の際には私設印刷局として暫定切手海圖其他官民の精密印刷を引

受け日本印刷史上に其功績を傳へらるるに至つた。現時は各電車切符、入場券、化粧品包紙

レットルからポスター地圖等の精巧なる印刷を行つて居る。當日は特に御繁忙であつたの

に拘らず工場諸員の詳細にして明確なる御説明を煩はしながら、石版、電氣版、寫真版、凹凸

版等各種印刷を見學し一同大満足で退出した

第十回工業見學

終りに支配人始め工務各課長其他の御懇情に對し厚く御禮を申述べる。

二月十二日午後二時半から第十回工業見學を造幣局に催した。同工場は器械の斬新、設備の完全は固より場内の整頓職工の精勤に關しては官立模範工場の一として既に定評のある處である。殊に數年前より能率課を設け能率

増進に關する諸調査之を實地に應用する點に於て確かに民間工場に一步を先んじて居るものである。當日は見學團一行は河村嚮導講師及中村、樋口、田中、板津の諸教官を始め其他學生九十四名の多數であつたが同局の厚意

により局員數名の得案内を忝うし工場全部に互つて詳細なる御説明を煩し、殊に各室の内部に入り親しく彫刻、磨解、伸延、壓印等の貨幣製作の各工程を見學し其間前記能率増進に關する新らしき諸施設を見、尙職工出入の際に於ける身體検査に就て進歩したる方法を知つた。以上短時間の見學に製作のみならず各種方面に付ての新智識を得たる事は見學團一行の厚く同局並に各局員に御禮を申述べるころである。

本學千里山學舎に在學中の山口縣人を以て成る同會では、此度會員中から最初の卒業生山本、國永同君を送り出すを機會とし、兩君多年の同會に對する盡力を謝し併せて其卒業目前途の多望を祝する意味に於いて、去る二月六日午後五時から天神橋筋赤玉樓にて總會を催ふした。定刻名譽會長新町教授、並びに客員松崎學生監を始め會員十數名參集先づ記念

撮影をなして宴に入り各自觀を盡して後同會並びに兩君の萬歳を三唱して午後九時半散會した。

『千里山』發刊

既報千里山學友會機關雜誌『千里山』は其後愈準備整ひ、去る二月二十五日新裝を整へて出版せられた。菊版百頁の氣持よい小冊子であつて學生島海君の筆になる長紙、口繪、カット等が先づ觀者の心を捉へた。卷頭には宮島教授の『大學の將來』なる小感想文をのせ尙ほ教授の執筆としては岩崎教授の『ギディンクス先生の風手』を收めてゐる。學生論文としては羽生忠、森畦孝夫、東清一諸君の詩歌、小島博、廣瀬義雄、萩野勉、堤サヤスキー、服部實、加藤勝一諸君の創作、翻譯あり其他感想、隨筆、學友會記事等を満載し學生の手になる雜誌としては可成り纏つたものである。

北村聽講生『ひげ』

出版祝賀會

本學聽講生北村兼子女史は此度處女作として隨筆集『ひげ』を出版したが同學の田中信治西村晃兩君等が主となつて學生の祝賀會を催ふすことになり、去る二月二十二日午後六時市役所地下食堂に北村女史を招いて一夕の宴を張つた。出席者は河合四朗、西村晃、橋詰滿彦、浪江源治、牧内要藏、原口實、田中信次等の諸君で司會者として西村君先づ立つて女史の大膽な達文を推稱し『ひげの』出版は千里山の學生間に一の力を與へたに挨拶した。之に對して北村女史は感謝の意を表するところあり一同歡談を交へて散會した。因に主催者側では北村女史が病中を推して出席したことを深く多きしてゐる。

雜錄

初めてチヨークを執りて

今 山 生

(一)

私が明治四十四年に東京高等商業學校を卒業して以來花咲き花辭する事十六度、錨銖の利を争ふ商人の群に互して、或時はマツラ大野の炎熱に苦しみ、或時はデカストロイの水雪に曝れた、風餐暴露とか極風沐雨とか云ふ言葉は利を征する商人にとりては決してリタラリイのものではない。私の友達の数人はシベリヤに亡び、幾人かは南洋の土となり、幾人かは遺骨となつて歐米の港から歸つた、商賣は實に死生の争である。

(二)

大正十二年九月一日關八州の天地震撼して祝融天地を盡した、王業も彌業もあつたものではない、朝露の命を天地に倚する人間の力の如何に小弱なるかをしきみ感じた、義兄は二兄を失ひ、母と姉の家は灰燼に歸した、私の事業も一物をも残さない。

難を關西茨木に避けて、仰いで浮雲の白きを見、伏して稻藁の黄なるを見て、我等が安住の地であつた東京の焼土を思ひ、實に涙欄干たるを覺えなかつた。

(三)

茨木に来てより歳を閱する二、宮島事務理事の知遇を受け本校にチヨークを執る身となり、商人と先生との氣分の相違をつらつら感じたが、餘り變だと思つた方面計り云ふと、暗夜が恐い、そこで此の感想文が核心に觸れるか觸れないか又長く續くか續かないかは筆者自身にも分らない、敵を知り已れを知るは百戦して百勝する法だと思ふ孫子は教

へたが、世の中は廣いもので已れを知らずに突進する奴がある、輒ち猪勇である。私なぞもその組であるが猪勇必ずしも排斥すべきでない、ハンニバルやナポレオンがアルプスを越へ、シイザアがルビコンを渡り謙信が川中島に一身を賭したのも又紀文が密柑船を出したのも、猪勇と云へば云はるであらう。近年の例も多々あるが生きて居る人には支障がある。

(四)

私は今猪勇を揮はんとするのである、猪は首が廻らない——尤も借金で首の廻らぬのは商人の常ではあるが——そこで真正面に馳けて行く、方向は鼻の向いた方である。私も鼻の向いた方に飛んでゆく積りだ、我黨の小子狂簡が惘然章を爲すか爲さぬかは私の知る所でない。

(五)

大體先生になつての感想は對外的と對内的の二つがある、對外的とは學校及び諸先生に對しての感であり、對内的とは自分が教ゆる學生生徒に對する感じと内省である。私が初めて千里山に行つた時は諸先生に對しても學生に對しても全く面喰つた。一體のの方が私に對して如何なる感情を抱いて居るのかサツパリ私には判らなかつた。そんな事は如何でもよいと云へば云はれるであらうが、キリストだつてヤケクソになり無花果樹を枯らした事がある。韓信は漂母が一飯の恩に報いた感じだつてそう馬鹿には出來ない。要するに私はミリュの相違を痛感したのである。前にも申し上げた通り私は十有六年と云ふものを商人として錨銖の利の爲めに東西に奔馳したものである、それが卒然として異人種である處の先生と云ふ階級の方方に交る様になつたのだから初め面喰つたのは無理ではあります、商人には愛嬌があるが先生には愛嬌が少くないと思つた——いや鳥渡侍てよ變な事をいふと首も危ないし、身體も危ない、助六は晦日に月の出る廓も暗があるから覺えて居ると

云ふた。

(六)

千里山はよい處だ、紅塵——いや黒煙萬丈の都を離れて山紫水明——水明には未だお目にかからぬ——の地である。經營者が地を卜するに巧みなのは感じ入つた、今は寒くていけないが學舎まで——に桃樹榿併せて百萬樹——これは少しほらだが——である。天々たる花唇は四月初旬には綻んであらう、今年も勞せずして花見が出来る事と今から楽しみにして居る。寮歌に「秀麗の地に健兒あり」とあるから如斯秀麗地に勞する學生は必ず健兒であつて欲しい、支那では深山大澤龍蛇を生す云ふが——

(七)

併し福島學舎は随分汚ない、第一アトモスフィアが悪い、大阪の内でも福島や九條は汚い處だと思ふ、千里山に引越せばよからうが夜學が困るだらう、併しそれも新京阪電車の運賃をまけさせて大學前から校舎まで電燈でもつければ出來ぬ相談でもあるまいと思ふ。誰やらの噂に天六に引越すかも知れぬと聞いたがどうせ引越すなら市の土地をロハで借りる事です、國家改善の捷徑は教育なんだから、そして大阪には人口に比例して教育機關が甚だ不完全だと思つて居るのだから。

(八)

大體大阪の文明は平面的だ、廣さはあつても高さが無い。東京の文明は立體的だ横も中も高さもある。私は常に思ふ、大阪人は紐育人と能く似て居ると、紐育人は高樓を築いて世界一と誇り長橋を架して世界一だと喜ぶ大阪人もその通りだ。浪花橋が竣成する日本一だと嬉しがる——それ大阪になつて人口が日本一だと嬉しがる——それも肥美い田甫まで市に編入して——文化に何等の深みがないその深みをつけるのは教育である。この點に於て關西大學の使命を見出す事が出来る教育の目的は自己完成である一體自個完成といふ

のは——いやこれはいけない何處まで脱線するか分らない。

(九)

初めて困つたのは學生諸君の學力の程度が分らなかつた事である、そこで隨分マゴマゴしたけれど二日三日と經つて大抵分つて來た。そして學生諸君に對して非常にアツファミチイを感じる様になつた。私は自分に子供が出來てよその子まで可愛くなつた、それと同様に先生になつて學生が可愛くなつた。私の友人に海軍少佐が居る、常に水兵は可愛い可愛いと云ふて居た、私はあんな髭顔の何處が可愛いのかと思つて居た。秦に王三と云ふものがあつた、自分の子が無いので養子を探つたら妻君に子が出來たがいよいよ養子が可愛くなつたやうな。

(十)

誰でも經驗する事であらうが初めて先生と呼ばれた時には吃驚した、今山さんとか今山君とか云ふてくれと頼んだが矢張りいけない、次の日には又先生と云ふ、そこですつかり諦めてしまつた。川柳に先生と云はる程の馬鹿でなしとか、先生と云つて灰吹捨てさせると云ふ様な事があるがマサカその意味でもあるまいと思つて居る。

(十一)

人間は神様ではない、誰にしても誤りはある。私は非を文らうとは思ふては居ない。孔子の云つた様に君子の過ちや日月の蝕の如しである。缺ぐるや人皆之を見滿つるや人皆之を仰ぐと云ふ様な心境に達し度いと思ふ。一つの非を敵ふがためには二つの非を重ねなければならぬ、二つの非を敵ふがためには三つの非を犯さなければならぬ、それは人間として悲しむべき事と思ふ。

(十二)

下愚は移らず馬鹿な者はいくら教へたつて駄目なんだ、——いや大分に調が亂暴になりました注

意注意——中愚と上愚は即ち移る、教育の目的は中愚を上愚に移し上愚を賢とし賢を大賢とするにある、即ち被教育者から云へばそれが自己完成なのである。

それと同時に天才教育と云ふ事も非常に必要であると思ふ。百の凡人を作るより一つの天才を作つた方が何れ丈け人類の幸福であるか分らない。天才を教育するとか天才を作るとか言ふのは間違つて居るかもしれない、天才は自然の賜である、教育したつて凡才になる事はない、作らうたつて作れるものではない、然し如何に天分が豊であつてもその天分を發露させるには機縁を要する。

機縁がなくては名玉も泥土を出づる事が出来な、蛟龍も池中を出づる事が出来な、天才教育と言つたのは世間一般に用ゐられて居る言葉だから拜借したまでであつて、或は天才啓發といふ方が適切であるかもしれない。啓發とは機縁を興ふる謂である、小學校の生徒も知つて居る様にアダム、イブ、の時代から幾千萬の人間がリンゴが木から落ちる事を見て居つたのだが重力説が肯定されたのは天才ニュートンのお蔭だし、電波が空を擴がること云ふ事實は誰でも知つて居たのだが無線電信を發明したのは天才マルコニイである。斯様な例を挙げれば數限りがない、要するに形而上の學にしろ形而下の學にしろ今日の文化を形成したのは天才のお蔭である。そこで天才教育に適合するのは私立大學である、官立學校の鑄型に拮めた様な教育——尤も私もその様な教育を受けて来たのだが——は粒が揃つて居るのはその強味であるが天分を殺す患がある。私立學校は一つの主義を以て立つ學校であると思ふ。その道に従つてその天分を補育し以て自己完成を成就せしむるは私立學校が最適であると思ふ。不羈奔放な天才を養成し得るのは私立學校に限ると思ふ。随分脱線しましたれ、しかし電車が脱線すると人命を傷ぶ患があるが私の脱線にはその憂がない。

(未完)

(第一頁より續く)

貨幣が貸出されずして貨幣所有者に依り、財貨購買の爲めに使用せらるる時には、資本關係の根底をなす處の借受人の貨幣所有者に對する從屬關係なるものは、一般に表はれ来らないもので、貨幣を欲求するものに對して貨幣を購買力として讓渡せらるる場合に於いて、貨幣は資本となり至るものである。貨幣其れ自體としては資本とはなり得ざる事は一般の他の財貨に於けると同様に於いて、何等異なる處はない。貨幣が資本となり得るのは、他に對する一經濟主體の特權となり、此の特權的地位を利得獲得の爲めに使用する場合に於いて、然りしなし得るのである。獨占利得の本質は財貨の所有者が所有なる事實を利用して、之れを原因として借手が自ら希望する財貨を所有せざるが故に、所有財貨の利用に依つて利子を獲得するの點に存在するもので貨幣利子なるものも所謂資本家の獨占利得に過ぎずして、債務者が貨幣額を所有せざるの理由に基きて支拂を餘儀なくせしめらるるものである。此事は利率の騰貴に際して明瞭に表はれ来るもので貨幣所有者は貨幣需要の増加を利用して、より高き利率を要求して、利子は獨占利得と同様に何等勞する事なくして彼れの懷中に流れ来るのである。上述の如く貨幣は自由なる購買力として獨占關係の對象となり、以つて資本的特質を具有するに至れるものなる事を確めたる後に於いて、吾人は次の如くに貨幣資本概念を定義せんことを欲するのである。貨幣資本は一の貨幣額にして、其の所有なる事實は所有者に對し、他の經濟主體に對する優越的地位を供するものにして、其は信用取引に依つて、利得獲得の爲めに利用する事を得べきものである。貨幣資本の根底には債務關係の伏在するものであつて、該關係の存續する限りに於いて、貨幣資本も亦存續するものである。

(未完)

● 新刊紹介 ●

法學博士 三瀧信三著

債權法提要 (總論)

本書は嘗て本欄で紹介した同著者の民法總則提要、物權法提要に倣へるものであつて債權に關する内外の重要な學說、判例及び立法例を比較し兼ねて著者の學說を述べて居る。著者は『提要』の形を以て民法全體に互る一貫した著述を爲さん企てて居るのである云ふ。民法が行はれてから既に二十有餘年になるが民法全體に互る統一著述のない爲め學習者は少からぬ不便を感じて居た。此の點からして吾人は著者の企ての完成を多大の期待を以て待つものである。今回債權法總論の下冊が出て著者の計畫の半以上は成就した譯である。

此の債權法提要總論は上下二冊六百餘頁より成るもので、説明は懇切平明であり、加ふるに著者の豊富なる語學力を以て遍く海外の學說、判例、立法例を参照し重要な語句には其に相當する外國語が挿入してあつて參考書として誠に格好のものである。著者の既刊書たる民法總則提要、物權法提要、及び擔保物權法と併せ用ふれば理論が一貫して居て學習に便なること甚大なるものがあらう。債權法研究の良書として敢て推奨する。

(東京、有斐閣發行、定價上冊金貳圓、下冊金貳圓五拾錢) S.T. 生

千里山歌壇 編輯局選

△ 靜安寺路 今山 實
風吹けば靜安寺路のプラタヌの青葉騒ぎて空掻き

曇る

△ 初夏の雨は嬉しと語り合ふ靜安寺路の若葉と青葉

△ 上海の靜安寺路の螢コッコツ鳴りて靴觸りよし

△ 二つ三つ鳥巢喚へる楊柳の並木に春の雨煙るかな

△ ハンノウのくれくれ道の道端の柳芽を吹く春は來にけり。

△ 冬夜雜詠 佐伯 三郎
パチパチはぜる炭火をなつかしみゆく冬の夜を淋しめるかな

△ じつかにも母の呼びぬる心地して汗して起きる夜明けなるかな

△ 人の世が淋しと云へばカラカラと笑ひて煙草投げ捨てし人

△ 近 詠 藤村まさる
さくいでて晩きに戻る此日頃夜更けひそかに靴の墨ぬる

△ 世に人の心淋しみ友ささへ此頃多く親しまぬかな

△ 巡 禮 田 中 信 一
かりそめの病に死しし君を知る久に聞きたる訪れにして

△ 今は亡き君こそ知りて其かみの思出さへも悲しかりけり

△ かそかなる其思出をいこほしむ尋れ來りし君がおくつき

△ はろばるこ此新墓に尋れ來て涙するかな人をなみつつ

學生寄稿

獨逸語の構成に付いて

法文學部法律學科第二學年 山池 浩

私は内容形式に於て幾多の不備を存し、尙ほ且つ拙文をも省みず第二の短文として筆を取る事にした。勿論この小文は、或る纏まつたものから研究してその結果生れ出たものではない。日頃餘暇にまかせて面白い事として書き探つて置いたもの、或は諸先生諸先輩から教へられたものを、思ふがまま羅列したまでの事である。従つて、不備缺點脱漏誤記多き事はどうしても免れ得ない所であるだがその點は同情深き讀者諸氏の宥恕を俟つより外致し方があるまい。そこで獨逸語即ち Wort は如何なる成分から組織されて居るものであるから云へば、先づ語幹 (der Stamm) があつてそれから山來したものが由來詞 (das abgeleitete Wort) あり又それ等の結合する複合詞 (das zusammengesetzte Wort) がある。而して由來詞と云へば語幹より由來せるもので、その語幹の前及び後に附加せられた成分をそれぞれ前綴 (das Präfix)、後綴 (das Suffix) と稱してゐる。例へば Vergnügen (愉快満足) の語幹は gütig と云ふ語幹にそれぞれ ver と ung の前綴、後綴を附加して一語を形成するの類である。私は「獨逸語の構成」と云ふ表題を掲げたけれど、實は、この前綴後綴が如何なる意味を有して居るものであるか又それを知ることに依つてそれだけの便宜が興へられるか云ふことを明瞭にしたいのが、この小文の主眼である。だから「獨逸語の構成」と云ふも決してその全部を云ふのではなく、ただこの前綴と後綴とを指稱してゐるに過ぎない事、及び殊に本紙に掲載したものには、最も重要なもの並に前

綴後綴として獨立の意義を有し、且つ比較的その意義に確實性を持つてゐるもののみを止めて置いた事を御承知願ひ度い。然しこれだけでは知る事に依つて單語の記憶上多少に拘らず資する所あるを信じて疑はない。

今筆を起すに當つて、尙ほ心残りのする事は、餘白の關係上詳細に渡つて記述することが出来ぬ事である。従つて出來得る限り簡單に止めて置いた然しこの前綴後綴を詳細に研究する事は、趣味の多い事ばかりでなく極めて重要な事である。後日餘暇を盗み何かの方法で訂正すると共に、もつと詳細に渡つての記述を發表したいものであるとは考へてゐるが、どうか、讀者諸氏の御助力、御奮發も望んで止まない。

(附言、左に掲げたものの中に語の分制法則に適合せざるもの二、三あるが、それは前綴、後綴を明瞭にせんがためである。)

第一、(A) 前綴と名詞

イ、ant は「或る中込みに對して」と云ふ意を示す。例 ant-worren 「返答」の如し。

ロ、erz-erste 即ち第一番目と云ふ語から來てゐるのではあるまいか、だから、もの「第一位」を意味す。例 Erz-bischof 「大僧正」Erz-diebst 「大泥棒」の如し。

ハ、ge は古代の獨逸語では「事」の集合を意味す。例 Ge-schwister 「兄弟姉妹」Ge-birge 「群山」山脈の如し。但しBergeはBerg「山」の變形なり。

ニ、misz は「誤り」又は「不」を意味す。例 Misz-verständnis 「誤解」Misz-erfolg 「不結果」の如し。

ホ、un は「否定」を意味す。例 Un-glück 「不幸」の如し。

ク、ur は「古き」を意味す。例 Ur-grossvater 「曾父」の如し。祖

(B) 前綴と動詞

イ、be は次に來る語が(a)名詞(b)形容詞(c)動詞となるに從つて各意味を異にする。

(a)、「附着」を意味す。例 be-festigen 「着物を着る」の如し。

(b)、「現在の傾向をより濃厚に導く」と云ふ心持ちを示す。例 be-ruhigen 「鎮める」「平定する」の如し。

(c)、「二つに分る」。

イ 自働詞と附加する時は他動詞となる。これは極めて必要事に屬す。例 be-gehen 「巡遊する」be-klagen 「憐む」「傷む」の如し。

ii 他働詞と附加する時は、唯その意味を強むるのみ。例 be-sehen 「注視する」の如し。

ロ、ent(emp)は古代の獨逸語 ant-int から轉化したものだ云ふ、その意味は多少異にしてはゐるが、大體に於て be の反對即「隔離」を意味するものであると思つて居れば、大間違ひはない様である。例 ent-fliegen 「飛び去る」ent-seelen 「生命を奪ひ去る」の如し。

ハ、er は物の「徹底到達」を意味す。例 er-reichen 「到達する」「届く」er-greifen 「むづろ握る」の如し。

ニ、ge は「繰り返す」を意味す。例 ge-denken 「考へる」「想起する」の如し。

ホ、misz は前述に同じ。例 misz-verstehen 「誤解する」の如し。

ク、ver は「解放」を意味す。例 ver-dringen 「逐ひ出す」の如し。以上より變化して ver 前を意味し、進んで前のもので「遮る」の意となる。例 ver-bauen 「建て妨ぐ」の如し。更に進み、「前に置く」の意となる。例 ver-zuckern 「砂糖をかける」の如し。尙ほ更に進んでそのものに「なり切る」の意となる。例 ver-kohlen 「炭になる」の如し。更に進んで全く「反對現象」を表はす場合がある。例 ver-bühen 「散る」「凋落する」の如し。

ト、wider は「反對」を意味す。例 wider-sprechen 「異議を申立てる」の如し。

チ、zer はものの「粉碎」を意味す。例 zer-streuen 「破壊する」「飛散する」zer-brechen 「ばらばらに碎く」の如し。

リ、durch は「貫通」を意味す。例 durch-gehen 「通過する」の如し。

ヌ、hinter は「後方」を意味す。例 hinter-gehen 「後に行く」の如し。

ル、über は「越へて」「上部」を意味す。例 über-treffen 「凌駕する」の如し。

ム、um は「週圍」「廻轉」を意味す。例 um-gehen 「廻轉する」「循環する」の如し。

ワ、unter は「下方」を意味す。例 unter-bleiben 「下に留る」「殘留する」の如し。

カ、voll は「充滿」「完成」を意味す。例 voll-giessen 「波々注ぐ」の如し。

エ、wieder は「再び」を意味す。例 wieder-sehen 「再會する」の如し。

第二、(A) 後綴と名詞

イ、chen 及 lein は共に縮少を意味す。例 Fräulein 「令嬢」Bach-lein 「小川」の如し。

ロ、el は別に意味なし。但し人類の名を附加して「下卑」の意味を有す。例 Beng-el, Fleg-el 共に「野郎」「粗野な人」の如し。

ハ、er, ver, ler は共に人格者を意味す。例 Japan-er 「日本人」Red-ner 「演説家」Tisch-ler 「指物師」の如し。稀れに「器械器具」の意味を有す。例 Leucht-er 「燭臺」の如し。又數詞を附加して、その數の「量」を意味することあり。例 Ein Deiss-er 「三十歳頃の人」Zehn-er 「拾錢の銀貨」の如し。

ニ、in は誰もよく知つてゐる通り「女性」を意味す。例 Schüler-in 「女學生」の如し。

ホ、ling (ing) は er が自働的な人格者を示すに反して他働的に所謂社會の恩恵を受け養育されつゝある「人格者」を意味する様である。例 Lehr-ling 「弟子」の如し。然し殆んづつ er と同義のもの及びこれに chen, lein と同じく Klein 「小々」を意味する場合が多い様に思はれる。例 Jung-ling 「青年」 Schwä h-ling 「虚弱者」「低能兒」の如し。
ハ、sal, sel は意味極めて不統一にして、一般の通用性を欠けるもの如し。例 Schick-sal 「運命」 Rats-sal 「謀」の如し。
右の外 en, ich, ig, ich, enlich 等の後綴もあ
るが語源學の研究上必要にして、獨逸語の研究には些したる利益もない様である。

(B) 後綴と抽象名詞

イ、e は意味に些したる變化なし。唯形容詞を附加して抽象名詞となり多くは女性名詞となるのみ。例 Treu-e 「忠實」の如し。
ロ、e は各種の意味を有し一括して其意味を表示する事はむづかしい。ただその概略を説明すれば、凡そ左の如し。
i 抽象名詞となる。例 Kinder-ei 「小兒らしき事」の如し。
ii 國名を附加して、其國民を表す。例 Turk-ei 「土耳其人」の如し。
iii 右の外「職業」又はその「場所」を意味す。例 Fischer-ei 「漁業」 Brauer-ei 「醸造所」の如し。但し動詞を附加して舉動の反覆を意味する事あり。例 Spieler-ei 「遊戯」 Pländer-ei 「奪ひ去る」の如し。

ハ、heit を keit とは殆んづつ同一の意味を有し主として形容詞を附加してその「狀況」を示す。例 Klug-heit 「伶俐」 Heilig-keit 「神聖」の如し。
ii ischaft は事物の「集團」を意味す。例 Gesellschafft 「社會」
i i 或る「關係狀態」又は「階級」を意味す。例

Kind-schafft 「親子の情」 Arbeiter-schafft 「勞働者團」「勞働者階級」の如し。
ホ、nis 「行爲の結果」「狀態を示す」。例 Kenn-t-nis 「知識」 Finster-nis 「暗黒」の如し。
稀に實行の「場所」を意味する事あり。例 Gefäng-nis 「牢獄」の如し。
ハ、tum は左の二つに分つて説明すべし。
i 名詞に附加する場合はそのものの「境遇狀態」を意味す。例 Studenten-tum 「學生生活」の如し。
ii 形容詞に附加する時はそのものの固定的「狀態」を意味す。例 Reich-tum 「富」の如し。
ト、ung と左の如く分つて説明す。
i 「動作」又はその「結果」を意味す。例 Befrei-ung 「解放」「自由」の如し。
ii 名詞に附加して事物の「集合」を意味する事あり。例 Wald-ung 「森林」の如し。
右の外 ie, ik, ek, ion, ur 等の後綴もあるが些したる意味もない様である。然しこれ等の語尾を有するものは外來語名詞なる事を知るは必要な事である。例 Mus-ik 「音樂」 Nation 「國民」の如し。

(C) 後綴と形容詞

イ、bar は「性質のある」又は「何何する價值、可能を持つてゐる」を云ふ意味である。例 frucht-bar 「豊か」 brauch-bar 「役に立つ」「使用可能」の如し。
ii 注意すべきは sam を附加したものと混同す可からざる事である。bar は常に受身であつて相手方よりして尊敬せらるべき價値を有するのである。例 acht-bar 「尊敬すべき」の如し之に反して sam は自働的である。例 acht-sam 「尊敬深き」「注意深き」の如し。
ロ、n, ern, en は何何「製」の意味を有す。例 gold-ern 「金製の」「holz-ern 「木の」の如し。
ハ、icht は lich と共に「類似」を意味す。例

stein-icht 「石の様な」 väter-lich 「父らしい」の如し。
ii ig は「持つてゐる」「性質のある」の意味なり。例 mut-ig 「元氣のある」 sät-ig 「親切な」の如し。
ホ、isch は「的」を意味す。例 jap an-isch 「日本の」 demokratisch 「民主的」の如し。
所が、人の名詞及び抽象名詞に附加するに「風」の「式」を云ふ意味を持つ。例 geeth-isch 「ゲーテ風の」 neid-isch 「嫉妬の」の如し。
ハ、haft は「性質のある」又は「傾向」を意味す。例 mangel-haft 「缺點のある」の如し。
ト、sam は「それに傾ける」「類似」「能力」を意味す。例 arbeit-sam 「勤勉なる」「働き好な」 wirk-sam 「有效なる」の如し。bar の異同は既述の如し。
子、selig はその有する「性質の高度」を意味す。例 arm-selig 「見づらくい」の如し。
リ、ios は「否定」を意味す。例 elern-ios 「両親のなき」の如し。

(D) 後綴と副詞

イ、dings は das Ding に通じらうからんの心持ちを有す。例 aller-dings 「勿論」 neuer-dings 「近頃」の如し。
ロ、falls は das Fall に通じ「場合」の意味あり例 nöigen-falls 「必要の場合には」の如し。
ハ、lich には固定的の意味なく、唯これを以つて作らるる副詞あるのみ。例 neulich 「近頃」の如し。
ii lings も些したる意味なきが如し。唯名詞の語尾を以て副詞を作るのみ。例 blind-ings 「盲滅法に」「無暗に」の如し。
ホ、teils は der Teil に通じ「部分」の意味あり。例 grossen-teils 「大部分は」「大半は」の如し。
ハ、weise は der Weise に通じ「方法」の意味あり。

リ。例 part-weis 「二つ宛」「一対宛」の如し。
ト、wege は der Weg に通じ「途」の意味あり。例 halb-wegs 「中途」 unter-wegs 「途中で」の如し。
子、massen は das Mass に通じ「割合」「程度」を意味す。例 gewisser-massen 「或程度に於て」 solcher-massen 「斯の如き程度に」の如し。
(E) 後綴と動詞
イ、ein, ieren は拉典又は古代佛蘭西語の語尾なりこゝに云ふ。従つてその意味明瞭ならず。唯その附加した語の意味を「働かせる」ことには一定す。例 prophet-eien 「豫言する」 jeger-ieren 「支配する」の如し。
ロ、en, igen もイと同義なり。例 fisch-en 「漁る」「釣る」の如し。
ハ、eln は「縮小」の意味あり。例 lach-eln 「微笑する」の如し。
ii、ein は大抵 er 又は ver の前綴を有する形容詞の比較級に附加して動詞を作るシルベである。然し形容詞の比較級は er の語尾を有するだけからんの場合事實上は en を附加するのではなくて単にロを有する結果となる。而して意味は唯形容詞を働かせるのみ。例 vergöss-ern 「大きく(たゞ) er-weit-ern 「擴張する」の如し
但し稀に名詞に附加する場合あり。例 ver-stein-ern 「化石せしむる」の如し。
ホ、sen, sehen, zen も共にその語を働かせるに止まる。例 bran-sen 「暴れる」 kat-schen 「パンチを手を打つ」 seuf-zen 「嘆息する」の如し。

短歌 青翁

何んなり淋しうなりぬ書庫を這ふ
出にてあれ人のこゝときき
宿命を思ひては見つ我生の
餘りに淋し君も然るか

いのちの囁き

……樂羊莊雜筆の二……

上木 樂羊

人間は何の爲に生きてゐるのかは知らない。等しくわたくしも人間である。現に生きてゐる。でもわたくしは、わたくし自身を知らうとしてゐるのであるが、いまだにわたくし自身を見究めることの出来ないままに、生きてゐる。つまり、わたくしは、「わたくしが生きてゐる」ことだけはわかる。が、しかし、慫うしたわたくしの生活は、ほんとうの意味に於て、生きてゐると言へるだらうか。また、ほんとうの意味とは何か。わたくしにはわかりっこない。

畏友、福西新右衛門君は、この程、次のやうなことを、わたくしに寄こして呉れた手紙のなかに書いてゐた。

「人間は生くる實在だ。生くると言ふことは、充たせざる欲求を充さんとして努力することである、而して、その求めんとする目的は、何であらうと問ふところではない。」

彼は「苦」を以て「生くる」實在の所以をいってゐる。そして、その「苦」は人間の絶へざる欲求に對する、對象の制限されてゐることに依つて生れるものであるとする。茲に、わたくしの考へなくてはならない問題が藏されてゐる。

幸か、不幸か、わたくしは生くるさびしさを感ずる。このさびしさは、わたくしの感ずるところでありながら、「何が故に」に答へえない。肉體に或る刺戟を加へる。「痛い」と感ずる。だから「痛い」のは、或る刺戟があつたからである。このやうな調子で「さびしさを感ぜしめた刺戟は何か」と反問しても、わたくしには答へえない。人間の

感じは、慫んな簡單なものぢやない。

なる程、人間は欲求をもつてゐる。その欲求がみたされうと思はればこそ、努力もする。

Conation (努力) といふ字は、ラテン語の動詞 Conari (意欲する) から來たものである。ごくその意欲が、意欲たるが爲に、努力する。でも、そこに人間のほんとうの姿があるとは思はれない。すくなくとも、わたくしはさう思ふ。

人間の抱く欲求は、はつきりしたのもあれば、また、ぼんやりしたのもある。はつきりした欲求は、その欲求が充足される可能性ありと認められたときに、「努力」の客觀的な形式をもつ。ぼんやりした欲求は、「努力」もなければ——しかし、その欲求を耐へ忍ぼうとする努力はあることもある——はつきりした苦痛も催さないのが普通である。何かしら、いらいらした氣持となつて現れる。

生れては苦しみて死す人の世をわれ思はれてけりいのちさびしも

生くるにはさびしこの世と思ひすれ死すに首尾なきわが思ひかな

わたくしの最近のうたである。わたくしには、ごまでも、「生活」といふことがわからない。わからないと言ふことがまたわからなくなつてくるもうひとさびさかのぼつて、わたくしは何の目的でこの世に生れ出たのかも、なほ一層わからぬ。

この世のなかには、生くるさびしさを感ぜない人。そのさびしさをたさへ感じても、これを胡覽化さうとする人。或は、そのさびしさに耐へてゆ

く人。耐へないで——耐へきれないで——生くることを止める人。などがある。そのいづれの人か幸福なのかは、知らない。一切は、わたくしにはわからない。

幾山河越えさりゆかば淋しさの果てなむ國ぞけふも旅ゆく

恩師、若山牧水先生のうたである。ちかごろ、わたくしは、このうたに限りなき親しさを覺えてゐる。わたくしはなにもわからないが、之のうただけは、ほのかながらも、わかつたやうな氣がする。

千里山俳壇 朝冷選

法文 津田道之助

冬ざれの寂光院に詣でけり
左義長や鳥居の下の二三
大根を圍ふ筵の霜の花
山茶花に神籤を結ぶ女哉
笹鳴や眞葛ヶ原の朝かげり
汲み上げし水に山茶花こぼれけり
乾蛙や柱曆の錆び釘に
敗荷や水に映りし城の垣
西すれば須磨寺道や末枯るる
木の葉散る下に商ふ繪本哉
仰ぎ見る城門高し松落葉
追加
酒に身を燃して天地沓てにけり
襟巻に埋めし顔の黒子哉
清荒神
粉雪散る銀香の乳房垂れにけり
一當季雜吟募集(毎月二十日締切)
一送稿先。兵庫縣芦屋局内深江 有田朝冷宛

會員諸氏ニ告グ

益御健勝奉賀候
陳者千里山學士會總會左記ノ通
開催致度萬障御繰合セ御出席被
下度御願申上候
大正十五年三月

千里山學士會

一、日 時 大正十五年三月二十日午後
正五時(卒業式當日)
一、會 場 大阪ビルディング(市電田
袋橋下車)
一、會 費 金參圓(當日御持參ノ事)
追テ出缺ノ御返事ハ三月十五日迄ニ御
願申上候

不許複製

大正十五年三月十三日印刷
大正十五年三月十五日發行

編輯兼發行人 辰 巳 經 世
大阪府西區土佐堀通四丁目五番地
關西大學學報局
印刷者 飯田彌之助
大阪府西區土佐堀通四丁目五番地
印刷所 三有社
大阪府此花區上福島北二丁目
發行所 關西大學學報局

大阪府此花區上福島
關西大學
電話土佐堀(一〇四九)
電話吹田(一五七〇)
大阪府外千里山
關西大學
電話吹田一二三

家賃の關係から、こに角私はその家を借ることに決めた。

その家といふのは、周圍が竹藪で包まれた、かなり廣い古別荘で、番人の老夫婦が住んでゐるきりだ。主家を四五間の所に六疊と三疊の離れがあつた。それが私の借りた家で、その横手の藪に接近して、昔風の刎釣瓶の井戸があつた。藪を隔てて壁の落ちかかつた物置小屋のやうなものが見え、そしてそのすぐ向側が寺につづいてゐた。靜かだといふより、どこかなくさびれた廢家のやうな印象を、その家からも附近全體からも受けた。

全く見もしらぬ所を、何心なく通つてゐる時にでも、私等はフト或嫌な印象を受けたり、憂鬱な気分であつた場所を遭遇することがある。そして又そんな所に限つて不吉な事件や、人の心を惹きつけるやうな噂のからんでゐるものだ。大きな惱みを持つた人等が、さうした周圍の氣分にまき込まれて、思はず夢のうちに身を破滅の底に沈めて行く心持ちをさうして否定することが出来やう。

引越してから四五日経つて、私は夜遅く歸つて来た。早春の柔かな雨が、音もなく闇の道や、畑やスツと突き出した大木の葉の黒いかたまりの中に吸ひ込まれてゐた。

往還から家へ這入る小路へ曲つて、例の竹藪に添つて私は歩いた。そしてその中途まで来た時、こつぜん傘の上に異様な物音を聞くと同時に、何か冷たい滑らかな物が、サツと頬べたを撫でて置れた。

私は水の棒のやうになつて凝立した。しかし、それが多分笹の葉に違ひないと思ひ乍らも、尙何物かに追ひすがられてゐるやうな心持ちで歸つた。そして雨戸を締めた瞬間、私は井戸の上に何か突つ立つてゐるやうに思へた。

私はそれ切り夜の外出を止めることにした。或日、私は井戸端から見える物置小屋の中で、一ヶ月程前に、ここの者さもわからぬ老母が、のたれ死をしてゐたといふ話を、別荘番の老爺から聞いた時、頸筋の縮むのを覺えた。

不氣味な幾日かが過ぎた。そして或夜のこと、私は誰かに呼ばれてゐるやうな心持ちで眼をさました。その時！私は青い電燈のカバーの反映を受けて、床の間の横手に力なく立つてゐる人の姿を見た。たしかに立つてゐる。私はギョツとした。瞬間、心臓の血が止つた。そして又逆流した。泡が脊中を匍ひまわつた。體中が無限の小の中に消えて行つたかと思ふと、激浪のいただきに、ゆらゆらとゆりあげられてゐた。

夢……しかし、夢にしては餘りに鮮やかな人の姿が、私にはわかりかねた。夜が明けると、私は先づ友のSを訪れた。そして一切を物語つてその家を空る事にした。Sは路路幽霊は否定したが、餘り氣持のいい家でないことだけは承認した。

Sが荷物をまとめて呉れた時、私は彼の肩越しに何心ない視線を床の間の方へ投げた。すると、その壁に雨が傳つて、薄汚く汚れてゐるのが眼に止つた。私は、瞳を心持ち細く閉ぢて、その汚れを見直した。それは恰も人が力なく立つてゐるやうに見えたのであつた。

私はヤツと失笑したい心持ちを押へた。何故ならその時Sは最後の荷造を終つた所たつたから。そして私はさう思つた。豫感だ……何となく不氣味な或る不統一な心持ち、出ないだらうかと思ふ卒直な感じ、それだ。豫感だ。それが幽霊だ。しかしSには何も云はなかつた。

私はSと共に、間もなく彼の下宿にたどりついた。(一九二五・一・二〇夜)

關西大學 指定洋服商
關西甲種商業 關大第二商業

大阪市上本町六丁目

長谷屋號

電話南 四五一二番
振替大阪五五三八番

●今宮支店 ●釣鐘町支店

關西大學 指定
同第二商業 關西甲種商業

明文堂 野島書店

大阪市此花區上福島北三丁目
電話 土佐堀 一二八六番
振替 大阪 三九九九一番

本學校友 野島藤次郎

文房具、制帽
雜貨、食料品

關西大學給品部

千里山學舎學生控所
福島學舎學生控所 内

山本靴店

大阪市北區上福島北一丁目
(但浮正橋筋大和田銀行前)

關西大學教授 宮島綱男先生著

經濟學原理

(卷上)

菊判 總クロス製
紙數約 三百五十頁
コロタイプ刷肖像數葉
定價 金參圓五拾錢
送料 金拾八錢

訂正第三版

著者が其透徹せる推理力と豊富なる語學力を以て研讀潛思幾年の後遂に成つたもの即ち本書である。堂堂一般經濟の原理を論じて照合するところ古今東西の史實、學說に亘り而かも之が嚴精なる批判檢討を通して導き出だせる結論を更に一步現代の經濟事實に近附けたる點に於いて學界稀に見るの好著である。行文平明にして正確、敘述亦繁簡其宜しきを得て經濟學を正しく理解し現時行はるる諸種の學說に對して相當の批判力を得る爲めには先づ第一に讀まるべき書物である。加ふるに各節末には詳細なる參考書目を掲げて讀者將來の研究に便し、書中引用するところの學說に關係深き學者の肖像を十數葉の鮮麗なコロタイプ版として挿み裏面に其傳記を附して、學說と時代の交渉並びに學說夫れ自身の印象を一層深からしめんと努めてゐる。蓋し經濟學史としても一の纏つた好參考書である。敢へて大方に獎む。尙ほ本版には書中引用せる學者のインデックスを付し、且つ第一、第二版に洩れたる又は其後公刊せられたる參考書の目錄を増補した。

東京市神田區錦町壹丁目貳番地

發行所 瞭文堂

振替東京五六一三番・電話大五〇四一

大阪巽區阿波堀通四丁目

大發賣所 大阪株式會社 寶文館

振替大阪三四三番・電話新三〇四三

○募集人員 第一學年約二百名、第二學年補缺若干名

○出願期間 三月一日ヨリ同三十一日マデ

關西第二商業學校生徒募集

○入學試験 四月一日 及 同 二 日

○特長 甲種認可、修業年限三ケ年、夜間教授

大 阪 市 上 福 島

關西大學福島商業學校舍

(會照ニ校本ヘ添ヲ錢五券郵ハ細詳)

關西甲種商業學校生徒募集

○募集 第一學年百五十名、尋常小學卒業

○願書 三月三十日マデ受付

○入學試験 三月三十一日及四月一日、詳細入學心得ニアリ

○入學心得 其ノ他ハ本校ニ就キ又ハ郵券五錢送付

大 阪 市 上 福 島

關西大學福島商業學校舍

校舎新築四月移轉

第一部 (甲種) (晝間部) 小學校長ノ推薦者ハ詮衡ノ上無試験

資格(尋小卒ヨリ) 第二學年(高一修以上)

第二部 (甲種) (夜間部)

資格(高小卒又ハ) 銀行會社商店委託生ハ無試験
第一學年百五十名、二年三年若干名

甲種北陽商業學校 (文部大臣甲種認可及指定)

願書 受付二月十五日ヨリ毎日午前九時ヨリ午後七時迄
場所市電天神橋終點北二丁目東現假校舎ニテ

新校舎移轉 四月一日ヨリ新京阪電車(千里山行)
淡路交叉點東南約二丁半

(高女) 本科 (五ケ年制) 一年(尋小卒ヨリ) 上級各學年若干名

(附設) 家政經濟科 (四ケ年制) 一年(尋小卒ヨリ) 二年(高小一)

修入學許可) 三年若干

文部省認定 淀の水高等女學校 (生徒募集)

願書受付 二月二十日ヨリ毎日午前九時ヨリ午後四時迄

場所 市電恩貴島南之町下車北へ淀川河畔
阪神電車傳法驛下車淀川ヲ下へ約三丁

大學生令依

大豫學科

募集學年 第一學年

出願期間 四月五日限リ

試驗科目 英語、日本作文、代數(商業學校卒業者ハ商算)

試驗期日 四月七日ヨリ同九日マデ

專門學校令依

專門部

募集學年 第一學年

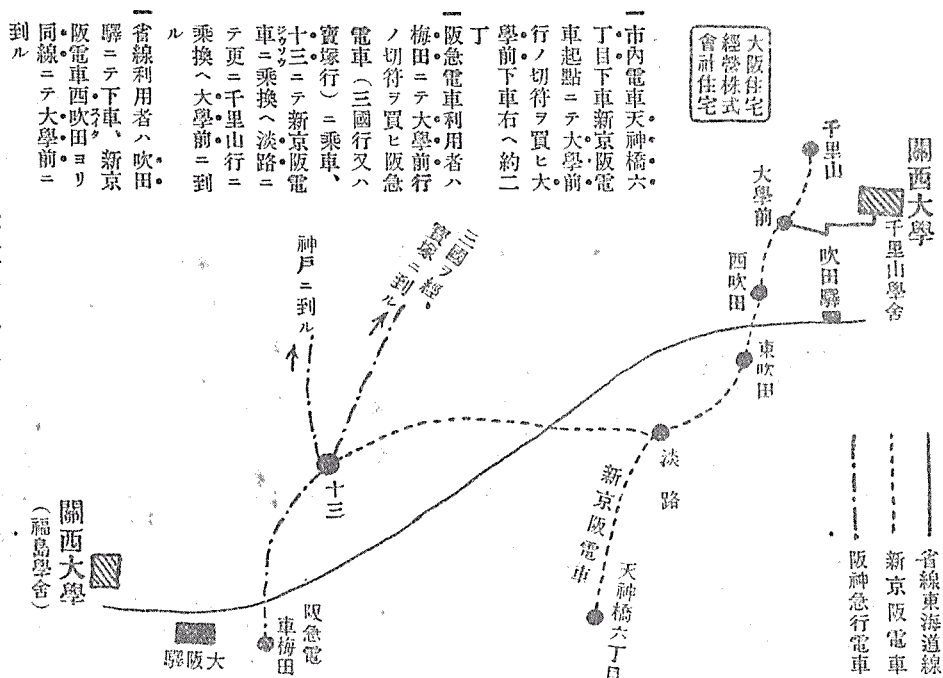
出願期間 三月三十一日限リ

試驗期日 四月二日及ビ同十日

科別 法律學科、商業學科、經濟學科、文學科

關西大學學生募集

關西大學千里山學舍交通略圖



大阪市外千里山
 關西大學千里山學舍
 電話吹田一三三

大阪市上福島
 關西大學福島學舍
 電話土佐堀一〇四九・五五七〇

會照ニ宛課務教舍學島福上ノ記明(部門專ハ又科豫學大)科學願志へ添錢五券郵八細詳